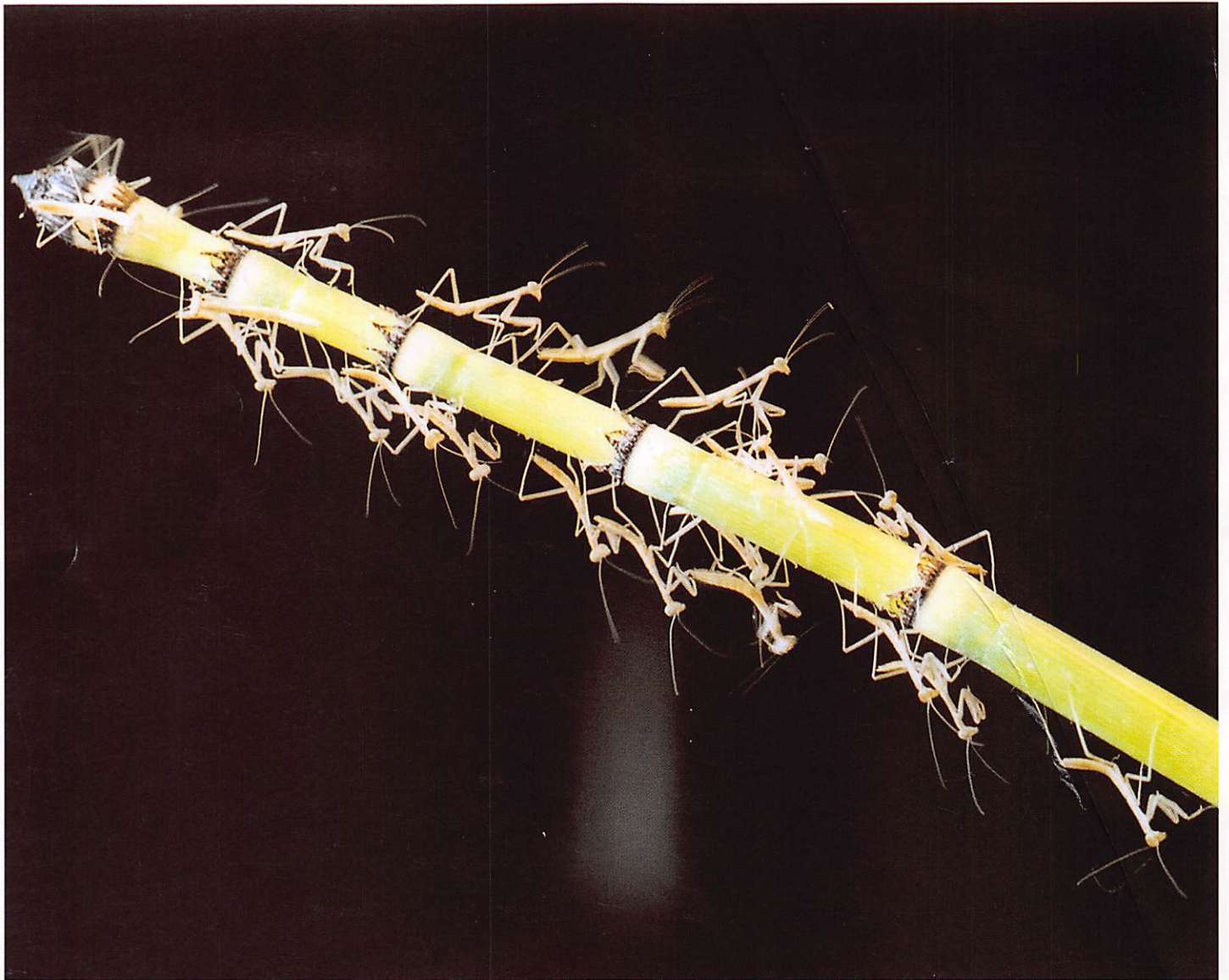


伝習館



東京同窓會會報

第8号 2008.1.1



20年度東京同窓會總會案内
修学旅行生との交流会
伝習館だより
方言・表現・イントネーション
山田（洋次監督）家の墓

卒業年次	氏名	卒業年次	氏名	卒業年次	氏名
中学第 48 回	宮本弘道	同上 (会計)	荻島直記	同上	中島英治
同上	中野貞幸	第 7 回	田中敬之助	同上	松藤由朗
中学第 49 回		同上	龍 弘道	第 19 回	芹川季代子 (立花)
中学第 50 回		第 8 回	樋口誠佑	第 20 回	高巢和登
中学第 51 回	松田 含 (星野)	第 9 回	石橋淑子 (古沢)	同上	東 寛治
中学第 52 回		同上	原田光紀	第 21 回	西原正道
中学第 53 回	古賀和典	第 10 回	内山秀生	同上	白谷政則
同上	木下憲男	同上	永倉素子 (跡部)	第 22 回	北原富美男
中学第 54 回	浅山親司	第 11 回	北原 博	第 23 回	坂本智臣
同上	富重克巳	同上	永尾弘行	同上	成田八重子 (成田)
中学第 55 回	江崎和夫	第 12 回	甲木宏明	同上	樋口貴美子 (田上)
同上	小泉祐一郎	同上	小野アケミ (岸川)	第 24 回	酒見和平
中学第 56 回	鬼丸敏男	第 13 回	田中利道	同上	笹子幸子
同上	成清良孝	同上 (会計)	石橋正通	第 25 回	
同上	永井俊一	同上 (副会長)	原田万紗子 (立花)	第 26 回	
高女第 45 回	石橋佳香 (石橋)	第 14 回	石橋俊一	第 27 回	
高校第 1 回	永江政勝	同上	永尾俊郎	第 28 回	吉開孝人
同上	増尾義勝	同上	吉田節子 (堤)	第 29 回	
第 2 回	石崎知見	第 15 回		第 30 回	橋爪政男
(会長)	江崎正直	第 16 回	梶島正司	第 31 回	
(編集委員長)	小野善睦	同上	安倍環江 (松藤)	第 32 回	柴田雅秀
第 3 回	酒井清行	同上	水澤昭子 (田中)	同上	大山 恵 (相浦)
同上	志牟田徹	同上	田中文夫	同上	守谷由佳 (富重)
第 4 回	荒井健之輔	第 17 回	宇木博巳	第 33 回	廣松崇人
同上	丸勢正夫	同上	北島文之	第 34 回	
第 5 回	岸 栄洋	同上	下吹越智佳子 (横山)	第 35 回	山口英治
(副会長)	松永 肅	同上	藤木清勝	同上	橋本知彦
第 6 回	石橋 修	第 18 回	福山博彰	第 36 回	松藤 亘
同上	井上弘子	同上	十時理展	第 37 回	江口一元

幹事未選出の学年は至急選出して事務局までご連絡下さい。

表紙写真の紹介

表紙 「押し合ひ屋」
裏表紙 「晩秋の風物詩」

の写真はどちらも石橋敏男先生撮影の作品です。

表紙写真は平成十九年度の福岡県展に見事入賞されたものです。

石橋敏男先生は中学43回・昭和十年三月卒業の大先輩で且つ母校伝習館で昭和二十二年から昭和四十九年まで二十七年間のながきに

わたり教壇に立たれました。(国語・教頭)

一昨年、米寿、今年は卒寿を迎えられます。

ますます矍鑠としてカメラをかついで東奔西走されています。

今も人生の先生です。

第8号 2008.1.1

東京同窓会本部より

平成二十年年頭の挨拶	会長 江崎正直	2
修学旅行生との交流会について	会長 江崎正直	3
生徒の心に残った言葉・感想文		4
決算収支報告書		4
賛助金ご協力状況報告		5
賛助金振込票通信欄コメント紹介		6
平成20年度 伝習館東京同窓会総会のお知らせ		7
東京同窓会の歩み	副会長 松永 肅	8
伝習館だより		10

先輩・後輩より

人間到る所青山あり	旧中56 成清良孝	11
伝習館野球部OB会選抜チーム		
マスターズ 甲子園へ	高3 山本 明	12
永江 秀作君を悼む——(寄稿)	高5 黒田左右太	14
知られざる柳川の星	高6 岡田哲也	16
方言・表現・イントネーション	高7 田中敬之助	18
転機	高12 村上国子	20
青春のパイプライン	高18 福山博彰	20
潮干狩りの思い出	高23 坂本智臣	22

学年幹事より

同期会テーマカラオケソング制定	高2 小野善睦	23
高6回卒(昭和30年卒)だより	高6 石橋 修	24
高14回東京同期会開催	高14 中ノ森重義	24

ふるさと瓦版

立花家に伝わる「橋姫」の面		25
大川昇開橋		26
山田(洋次監督)家の墓		26

書籍紹介

柳川の歴史3		27
柳川の美術II		27
柳川ゆかりの人々	高7 田中敬之助	27
日本画入選	高5 岸 洋子	28
綿貫画伯個展の紹介		28
募集		28
編集後記		28
FAX 送信紙		

伝習館



東京同窓会 会報

東京同窓会本部より

平成二十年年頭の挨拶

同窓会を活性化しよう

伝習館東京同窓会 会長 江崎正直

会員の皆さん！ 健やかに新年をお迎えのことと存じます。平成が20年、本会報が第8号、月日の経つのが早いのをしみじみと感じています。

今年は隔年ごとの総会の年に当たります。2年に1回の総会を来る7月20日（日）に開催の予定です。改めてご案内は差し上げますが、一人でも多くの会員の参加を得て、老若男女、会員相互交流の場になるよう盛大に開催しましょう。柳川物産展なども予定しています。総会に先立つ講演は、同窓生の新谷弘実（高4回）博士をお願いしてあります。新谷博士は胃腸内視鏡挿入法を考案した世界の権威者であります。『病気にならない生き方』ほか次々にベストセラーを出し、時の人であり、伝習館の誇りであります。身近な健康法について興味深い講話を期待しています。

去る9月11日には母校より修学旅行生が上京し、先輩・後輩の盛大な交流会を催しました。茶髪の生徒がいなく、高校生らしくて好感が持てます。経験豊富な先輩方と直に話ができて、広範な話題が飛び交い、伝習生として誇りが持て、得るものも多かったようです。

伝習館は昨年、福岡県の人材育成プログラム推進校8校の1校に選ばれており、生徒たちもその期待に応えて更に成長してほしい。

本会報は年2回発行を目指してスタートしましたが、賛助会費が伴わず、年1回の発行になってしまいました。会員2000名への発行費が100万円かかります。収入の方が200人で100万円、これも大口納入者のおかげで、やっと100万円に達しています。つまり10人のうち9名の方は会費未納です。せめて10人中最低2人は賛助金1口2000円を納める愛読者になってほしいものです。

5年前の創刊号に添付しました「賛助金協賛のお願い」の中に書きましたように「同じ学び舎に学んだご縁を大切に、老いも若きもお互いに助け合うのが同窓会であります。会の活性化のためには情報の共有化が大切であり、それには会報発行が有効である」との発想から、会報発行に踏み切りました。この考えは今も変わっていません。どうか皆さん、この主旨にご賛同いただき、一人でも多くの方が賛助金を納入いただくようお願いします。

新しい年を元気ある同窓会にするために、皆様方のご協力をお願い致します。



やっと実現した交流会

——修学旅行生と東京同窓会——

江崎正直

先輩と後輩の交流会が東京・早稲田のリーガロイヤルホテルでやっと実現しました。平成19年9月11日のこと。6年前からの念願が漸くにして叶えられました。

東京同窓会・会長に就任した平成14年に柳川を訪れ、伝習館へ挨拶に伺いました。

「館長先生、最近の修学旅行はどこへ行っていますか。」とお尋ねしたら

「札幌か志賀高原へ四泊五日のスキー旅行です。」聞いてびっくり。

「高校2年と言えば人生で最も重要な勉強期なのに、スキーに浪費するとはもったいない。スキーは社会人になってから、いくらでもできます。」と私は猛反対した。

「この20年来、福岡県内どの高校もスキーに行ってますよ。」館長先生弁解のあと

「それでは江崎さん、東京同窓会で何かやってくれますか。」

と切り替えされて誕生したのが、修学旅行生と東京同窓会との交流会です。

交流会は生徒が先輩から刺激を受けて向上することを期待しています。お世話になった母校へのささやかな恩返しでもあります。私の本来の希望は、昼は社会研修、夜は後輩の生徒と先輩が車座になって、膝を突き合わせて語り合うことでした。

第1回交流会の平成16年1月は、四泊五日のスキーツアー初日一日だけ東京に

泊まり、学年幹事ほか皆さんの協力を得て、昼は会社訪問、NHKその他研究所などの見学、夜は会長講演で終えました。座談会の方はホテル側から場所が狭いと理由で実現しませんでした。学校側も交流会の意義を認めたものの、ホテルから会場が狭いからと断られ、第3回平成18年1月までは東京に一泊し、夜は講演会だけで終わっていました。

第4回平成18年9月からは学校の方針が大転換し、スキーを全廃して三泊四日を全部、東京泊で消化することに変わりました。

初日の昼間は旅行社の斡旋で大学や研究所、会社見学などの社会研修に充てる。夜は午後8時から二人の副会長講演のあと、各クラス別に生徒と先輩が向かい合っただけの交流会（座談会）がやっと実現しました。しかし時間が僅か30分で短く、中途半端で悔いが残りました。

今年の第5回平成19年9月11日は前年の轍を踏まず、開始時間も少し繰り上げ、挨拶も10分以内で済ませました。すぐに各組毎に円陣を張り、交流会（座談会）に90分かけたので充分に話しがはずみ、生徒たちが先輩に学ぶことも多かったようです。会場が広がったので6組のグループ分けも、ゆったりしていました。

これに先立ち、学校側から前もって東京同窓会への質問項目を各組から出してもらっていました。東京同窓会では5、6名の組担当を決め、提出された質問に事前に回答を用意しました。30通3万字

に及ぶこの膨大な回答書を手田副会長にお願いして、各組別に一覧表にきれいにまとめたいただきました。社業でも超多忙の原田副会長は睡眠時間を削って作成してもらったものです。この一覧表を前もって学校へ届けました。生徒たちは事前にそれを読んで予備知識を持って東京へ来たから、双方の会話が非常にスムーズに進みました。

9月末、学年主任の中村先生から各組別にまとめた交流会の印象記録が送られてきました。「印象に残った話・言葉」と「生徒たちの感想」について各人の意見が書かれています。これを要約して別表にしましたのでご参照下さい。生徒の皆さんが異口同音に、交流会は有益で先輩の話を通して伝習生としての誇りが沸いてきた、体験談が幾つも出て参考になった、など所定の90分を有効に消化することができました。団長としてこられた近藤教頭先生からも「交流会は生徒にとって、とてもよい刺激になった」とのお礼状を頂戴しました。

多忙な時間をさいて出席された先輩方もかなり居たのですが、このような生徒の前向きな印象を聞けば、出席した甲斐があります。母校の良い反応を知り「交流会をやったよかった」とうれしく思います。今後と同じような機会があれば更に質の向上を図っていきましょう。



生徒の心に残った言葉・感想文

修学旅行生交流会について

生徒の心に残った言葉

- ・学習と両立して部活動を頑張れ
- ・自分にも他人にも嘘をつかない誠実さが大切
- ・本を沢山読もう
- ・友達を大切にすること 人との出会いを大切にしよう
- ・将来の夢や目標を持とう
- ・自分の言葉で表現 発言出来る様になろう
- ・今という時期を大切に
- ・外国にも目を向け視野を広げよう

生徒の感想

- ・伝習館の先輩方からいろんな経験談を聞ける機会があつてよかった。頑張る勇気をもらった。
- ・先輩の皆さんが伝習館の同窓生であることに誇りを持っておられる事を一番感じました。
- ・先輩の皆さんがとても親切に熱心に話をしてくれて嬉しかった。
- ・必然と偶然の話は交流会の後もずっと考えさせられた。
- ・何かを作り出すには哲学を持つことが大切という言葉は印象に残った。

- ・今自分が出来ることを精一杯にやるという言葉は心をうった。
- ・発言することが苦手なので自分の言葉で発言出来るようになりたい。
- ・学習と部活の両立について頑張ろうと思つた。
- ・年代の近いOBがいて欲しかった。
- ☆偶然は必然と必然とのぶつかり合い、出会いである。高校時代数学の先生の具体的な例をあげての説明を今も覚えているという話をした

- 交流会出席協力者名
- 江崎和夫 中55 白谷政則 高21
 - 江崎正直 高2 樋口貴美子 高23
 - 古賀苦住 高2 柴田雅秀 高24
 - 平河智 高2 酒見和平 高24
 - 酒井清行 高3 吉開高人 高28
 - 荒井健之助 高4 橋爪政男 高30
 - 丸勢正夫 高4 大山恵 高32
 - 渡邊喜亮 高4 境和晃 高32
 - 松永肅 高5 守谷由佳 高32
 - 田中敬之助 高7
 - 内山秀生 高10
 - 永倉素子 高10
 - 北原博 高11
 - 小野アケミ 高12
 - 原田万紗子 高13
 - 石橋俊一 高14
 - 吉田節子 高14
 - 宇木博巳 高17
 - 福山博彰 高18
 - 芦川季代子 高19
 - 高巢和登 高20

伝習館東京同窓会決算収支報告書

平成18年4月1日から平成19年3月31日まで

単位：円

科目	金額	科目	金額
収入の部		支出の部	
普通賛助金	1,357,000	会報制作費一式(7号)	703,500
		会報送料一式(7号)	185,097
		伝習館同窓会広告料	40,000
		会報等送料	5,040
		コピー代等事務費	8,193
		郵便振替手数料	22,980
		印字サービス料	2,600
当期収入	1,357,000	当期支出	967,410
前期繰越金	1,749,980	次期繰越金	2,139,570
合計	3,106,980	合計	3,106,980
		繰越貯金残高	1,015,290
		繰越現金残高	1,124,280

注・学年幹事会、会報編集委員会への出席者の交通費、飲物代等はすべて各員の個人負担でやっております。賛助金からの支出はありません。

【賛助金ご協力状況報告】

平成19年1月1日から平成19年10月31日まで

卒回	氏名
高7	中村啓子
高7	大藪成人
高7	浜野弘子
高7	古賀日出男
高8	池上藤則
高9	新谷弘子
高9	古賀弘子
高9	岩丸純芳
高9	福島たか子
高9	北原久也
高10	内山年子
高10	江口武
高10	中村迪子
高10	大淵静夫
高10	金納文子
高11	佐藤輝代子
高11	秋永栄子
高11	大淵慶紀
高11	駒田サヨ子
高11	北原博
高12	深谷悦子
高12	馬場敦子
高12	鈴木弘子
高13	田中広征
高13	田中利道
高14	岡田鶴子
高14	志田和子
高14	浜尾淑江
高14	今泉京子
高15	後藤民子
高16	黒田夕工子
高17	中島功
高18	三小田国光
高18	井口文章
高18	松田由紀子
高19	森田達雄
高19	梅岬せつ子
高19	石橋和代
高20	古賀栄樹
高20	近藤敬介
高20	井口ちつ子
高21	柿野貴美子
高22	竜美代子
高22	平田孝子
高23	古賀恵子
高23	坂本智臣
高26	野口佳延
高27	松藤峯成
高28	石橋孝一
高28	中島真二
高32	咲村あかね
高32	柴田雅秀
	大城千代子
協賛0.5口	
高4	花島啓之
高23	下田真知子

卒回	氏名
高13	原伸
高13	松本文子
高15	一木克子
高16	西田イサ子
高19	芹川希代子
高23	樋口貴美子
高28	吉開孝人
協賛1口	
中49	淡輪晋
中49	長崎哲夫
中49	松尾淳
中50	田辺一彦
中50	三山心栄
中53	深町昌弘
中55	馬場淳三郎
中55	吉弘尚正
中56	高田信義
女31	林チセ
女42	寺田ソエ子
女44	宝珠山福代
女45	板井敏子
女45	長崎和代
女46	松藤良子
女47	松永征矢子
高1	高木陽二
高1	高石満之
高1	高古賀定愛
高2	大橋貞夫
高2	田中豊子
高2	徳安朔子
高2	諸藤繁樹
高2	松平隆子
高2	上河京子
高2	古賀苦住
高2	池田国彦
高3	臼井ヒコ工
高3	田島順次
高3	高山久吾
高3	村井タカ子
高3	園田麗子
高4	緒方常子
高4	大久保淳子
高4	武田八重子
高5	原タカコ
高5	野口幹彦
高5	酒井法彦
高5	宮川政寛
高5	倉林千鶴子
高5	松永悦子
高5	黒田左右太
高5	松尾久子
高5	岸洋子
高5	森時子
高6	石橋修
高6	池田勝嗣
高6	待鳥清治
高6	梅崎元也
高6	森清旨
高6	内村真澄
高6	中田充
高6	井手眞
高6	井手由紀子

卒回	氏名
高7	中村奨祐
高7	米永勝至
高7	大津山砲三
高7	龍弘道次
高7	田中健佑
高8	樋口誠人
高8	池田孝治
高8	木下清之
高10	川口圭之
高10	松藤俊正
高10	大村平人
高10	中島哲夫
高10	葛西経子
高11	石橋秀男
高12	甲木宏明
高12	江口克典
高12	小野あけみ
高13	松本巖子
高14	今村悦子
高18	十時理展
高24	馬淵邦助
高24	山田直美
高24	酒見和平
高27	江崎橋圭
高27	高橋圭大
高30	古賀賢司
協賛2口	
中53	浦川浪来
中56	松本一郎
女31	跡部愛子
女46	片桐悦子
高7	松永泰輔
高8	龍敏之
高9	堤泰充
高10	東辰子
高11	木下淑子
高15	小河良充
高17	藤木清勝
高18	吉田シズカ
高18	中村易世
高18	古賀行夫
高26	園賀利朗
協賛1.5口	
中46	内山田敦
中55	古賀昭夫
中55	木下宗治
中55	高巢和夫
中55	金森隆茂
女47	高巢愛子
高2	石橋慶孝
高3	木村澄子
高3	酒井清行
高3	西山彰
高4	松藤清春
高5	家入千恵子
高7	久良木博道
高9	高口猛
高11	星野公代
高11	龍勝和
高12	横山正
高13	西山雅
高13	山田孝輝

卒回	氏名
協賛65口	
高12	町野彰
協賛50口	
高2	江崎正直
協賛15口	
高4	倉本博子
協賛10口	
高4	新谷弘美
高6	岡田哲也
高20	山田雄司
	平野澄江
協賛7.5口	
中54	武藤吉郎
協賛7口	
高17	山本祥子
協賛5口	
中47	徳永樹夫
高2	江崎洋二郎
高2	吉川良平
高2	小野善睦
高5	永江秀作
高5	松永肅
高5	田中禮二
高5	岸崇洋
高6	戸上軍治
高6	藤木信之
高6	荻島直記
高6	木村峯子
高8	永倉正彦
高9	都留昇
高10	内山秀生
高11	徳永雄三
高11	近藤素子
高14	古賀清
高16	花島正司
高17	跡部與志
高21	白谷政則
高34	柳内真理子
協賛3.5口	
中56	松本学
協賛3口	
高4	丸勢正夫
高7	田中敬之助
高10	永倉素子
高18	福山博彰
協賛2.5口	
中45	北島年夫
中51	塚本和吉
中51	井上哲夫
中52	大内礼三
中55	武藤徳一
中56	成清良孝
女34	古賀弘子
女46	青木栄
女47	作山ミツ
高2	廣松敏克
高2	石崎知見
高4	池上正則
高4	荒井健之輔
高5	中村義行
高5	江口政司
高6	白谷茂満

(1口 2,000円)

伝習館東京同窓会賛助金 振込票通信欄コメント

敬称略

進路状況・思い出の柳川・先輩後輩より・ふるさとの瓦版・と面白く拝見しました。

高女47回卒 作山ミツ

いつもお世話になるばかりで申し訳ありません。心ばかり一助となりますよう送らせて頂きます。編集から出版までご苦労さまで手弁当出費の由何とかして下さい。

高校5回卒 中村義行

「会報伝習館7号」有難うございます。本年も「東京同窓会」の益々の発展と、会員の皆様のご活躍とご健勝を心よりお祈り申し上げます。

高校20回卒 近藤啓介

郷土の星「琴奨菊」がんばれ！

中学49回卒 長崎哲夫

お世話さまで。毎回楽しく読んでいます。今後も宜しくお願い致します。

高女45回卒 長崎和代

お世話さまで。何時も楽しみに読んでいます。

高女46回卒 片桐悦子

今年4月には78才になります。現在ドラッグストアで働いています。体の方はあちこちガタガタです。生涯現役と思っておりますが何時まで持つか？ 解りません。皆なさまお元気で！

高校2回卒 廣松敏克

会報第7号、柳川、東京のことを思い浮かべながら楽しくつかしく拝読いたしました。

江崎会長を中心として東京同窓会がますます発展することを祈念いたします。

高校2回卒 吉川良平

会報7号のご送付有難うございます。松永伍一氏の講演中々良く纏めてありました。高戸先輩の文庫本早速入手して読んでいます。

高校6回卒 戸上軍治

江崎会長をはじめ幹事の皆様、東京同窓会のご運営ご苦労さまで。東京同窓会会報誌、毎回楽しみに拝読しております。

松永伍一先生の講演もさることながら、さらに紙面に拝読し、懐かし感動いたしました。

ありがとうございます。

高校11回卒 秋永栄子

いつも、いろいろの情報有難うございます。楽しみに拝読させて頂いています。

高校12回卒 町野彰 (高校12回生地元世話人)

東京同窓会役員の皆様へ！ 会員の親睦と会報の発行にご尽力され本当にありがとうございます。昨年高12回生学年幹事の井上 功君の突然の逝去、生前、東京同窓会参加への強い熱意と厚い思いをお汲みおき、伝習館卒の誇りと友情の印、記念樹の写真を表紙に掲載させて頂き感謝しております。又、多数の会報を原田万紗子様、小野善睦様のお力によりお送り頂きました。当時の先生並びに地元柳川・九州の友に東京の皆様のご活躍をお伝えしたいと思えます。寒い折、益々のご健勝とこの度のご厚情に重ねて御礼申し上げます。

高校4回卒 池上正則

会報ありがとうございます。松永伍一さんの講演内容が親友小野編集委員長の素晴らしい要約で掲載されており、早速コピーを長谷健頭彰会の事務局長に渡し、大変喜んでもらいました。

又、関東高四会の記事も詳しく紹介されており、掲載ありがとうございます。東京同窓会の更なるご活躍を祈念します。

高校3回卒 酒井清行

紙上に同期生の氏名をみつければ、元気なことを確かめ喜んでいきます。修学旅行生とはじっくり時間をとって話したい、伝えたい、励ましてやりたいことが沢山ありますね。若い後輩に期待甚大。

高校5回卒 酒井法子

楽しく拝読しています。紙上に知人の名前を見つけては懐かしく安堵しています。

高校13回卒 山田孝輝

お世話をして戴いている皆様ほんとうにご苦労様です。会報を読ませて戴くたびに編集の大変さを痛感します。

高校7回卒 大藪成人

会報第7号ありがとうございます。楽しく読みました。柳川のことが思い出されます。

高校10回卒 葛西経子

東京同窓会の会報をつかしく読ませていただきました。同窓生というご縁を大切にしたいと思えます。

高校7回卒 浜野弘子

東京同窓会報、いつも楽しみにいたします。

たしております。今回は松永伍一氏の記事をつかしく楽しく拝読しました。高校まで蒲池に住んでいましたので、松永氏が上京なさる迄の間、私の家の前通って行かれるのを幾度かお見かけしました。朝日新聞に先生の記事や作品が掲載されたのをとても興味深く拝読したものです。東京同窓会に出席出来なくてとても残念でした。

中学47回卒 徳永樹夫

昨年末から体調不良で入院加療。1月下旬に漸く退院しましたので大変遅くなって申し訳ありませんでした。

高校7回卒 大津山砲三

松永伍一氏の「思い出の柳川」興味深く読ませていただきました。

高校18回卒 中村易世

会報ありがとうございます。ぜひ聞きたいと思っていた松永伍一さんの講演ですが、都合がつかず残念ながら不参加。会報の講演録を興味深く拝見しました。多謝！

高校6回卒 森清旨

江崎会長初め役員の方々には大変お世話になり感謝致しております。会報7号では、松永伍一先生の講演記事が大変大変興味をもって楽しく読みました。特に五木寛之さんに関した記事は普通では聞けない逸話を知ったと思います。今後ともよろしくお願い申し上げます。

高校23回卒 下田 真知子

「先輩・後輩より」を楽しく読んでいます。大先輩の学生時代は、大らかでいい時代だったんですね。「柳川サンイタテ来たパンモ」方言満載で楽しくなりました。

中学45回卒 北島年夫 (故人)

会報第七号ありがとうございます。

45回卒北島年夫儀臨床養生中のところ薬石効なく平成18年1月8日85才を以て永眠いたしました茲に生前の御厚誼を深謝し御通知申し上げます。(北島ハツエ)

高校7回卒 古賀日出男

平成4年連れあいを亡くして、今年で14年家で一人暮らしをしています。生きる支えは年金と細々と行っている治療師の仕事、同窓会、同期会です。

高校6回卒 中村充

今冬はこちらも暖冬です。適当な周期で雪が降り適当な雪かき運動でからだの調子もいよいよです。(札幌在住)

高校11回卒 徳永雄三

伝習館東京35会幹事さん達は物知りで世事に猛けていて、年数回いつも低予算で極上の楽しさを与えてくれます。参加20名、この欄で「いつもありがとうございます」とテレながら言わせて下さい。

高校16回卒 西田イサ子

いつも立派な会報を届けていただきありがとうございます。

実は、私定時制通学だったので、何となく敷居が高く、友人も居なかったのでもちよつと遠慮しておりました。でも故郷をなつかしむ思いは変わりません。本誌3ページを読んで深く反省しているところです。

高校12回卒 鈴木弘子

おそくなりしました。

会報楽しみにしています。ふるさとの情報とわかるの大変でしようがよろしくお願ひします。

高校24回卒 山田直美

毎号有難く、なつかしく拝読しております。年とともに柳川のことになつかしくなってきました。会報で元気をもらっています。幹事の皆様にご感謝・感謝です。

高校15回卒 一木克子

遅くなって申し訳ございません。編集の方々ご苦労をお察しします。これからもよろしくお願ひします。

高校2回卒 松平隆子

東京同窓会のために御尽力いただきありがとうございます。御身体を愛い下さいます。公私共に御活躍下さいます事をお祈り致します。

中学56回卒 松本学

今後とも母校や郷里の状況等お知らせ下さい。編集の方々御苦労様です。

中学46回卒 内山山敦

いつも会報、ありがとうございます。なつかしさを一杯の記事、うれしくよんでみます。

平野澄江

会報いつもありがとうございます。

東京に出てから柳川の事はふりかえりたくないという態度でしたが、50半ばすぎるとふる里を見直し想いをせ始めたやさき、ガンで昨年あつさり亡くなりました。亡き夫の心として会費振込みます。大変遅くなりました。

高校9回卒 福島たか子

高校9回(未記入)になっていきます。

記入をお願いします。宮崎駿監督による「柳川堀割物語」のこと修学旅行がスキーから東京研修旅行に変更、

杉森が女子校から男女共学になる等興味深く読みました。読後柳川の友人に送りました。

会報発行者の方々の御苦労に感謝しつつ次回を楽しみにしています。

高校10回卒 大村平人

いつもながら同窓会報の出来映えには感服しております。編集委員の皆様のご苦労振りが目に浮かびます。

大城千代子

両親が長い間お世話になり、ありがとうございます。

父 大城二男 第26回伝習館(85才と4か月で永眠)

母 大城俊(旧姓 蒲池) 第二十六回高女(95才と4か月で永眠) 私は娘で会報を楽しく読んでます。

高校16回卒 黒田タエ子

何か月も前に送られていたと思います。

封筒入っていたので気がつきませんでした。大変おそくなりました。

高校18回卒 十時理展

県立佐賀北高の甲子園優勝の快挙 伝習館の甲子園も近い

高校9回卒 北原久也

いつも楽しく読んでいます。賛助金とは言え会費の意味もあるとの話を思い出し、この会報が続けられる事を願って小額ではありますが送ります。

中学56回卒 成清良孝

少々自画自賛ですが、貧者の一灯をともしせていただきました。

平成20年度 伝習館東京同窓会総会のお知らせ

隔年開催の同窓会総会を下記のように開催します。

同じ学び舎に学んだ者同士の老若男女が肩をすり合わせて何の遠慮もなく自由に話し合える唯一の場です。この絶好の機会を逃すことなく、皆様お誘い合わせの上、多数ご参集いただくようお願いいたします。

伝習館東京同窓会 会長 江崎正直

日時：平成20年7月20日(日) 午前11時より

受付は10時30分から

場所：ホテルグランドパレス

会費：10,000円(飲食費のほか通信費、会場費等を含む)

講演：11時より12時まで1時間

講師：新谷弘美先生

新谷先生は高校4回卒の同窓生で、アルバート・アインシュタイン医科大学外科教授。胃腸内視鏡学の世界的権威でベストセラーが何冊もあります。日米間を往復して医療に当たる超多忙の時間をさいて来ていただきます。

身近でわかりやすい健康に関する講演をご期待下さい。

ベストセラーの2、3を紹介すると、

新谷弘美『胃腸は語る』弘文堂 1998年

新谷弘美『病気になる生き方』サンマーク出版 2005年

新谷弘美『病気になる生き方2. 実践編』サンマーク出版 2007年

お楽しみ抽選会、柳川物産即売会等企画しています。

総会が近づいたら別途、総会案内を差上げます。

東京に輝ける三稜の星たち

「東京同窓会」の歩み—その8—

副会長 松永 肅

古賀会長の業績の二つ目は前号で予告いたしましたとおり、サッカーの全国大会出場に関する事であります。

平成元年11月に母校伝習館のサッカー部が翌年の1月2日から8日までの7日間、東京の国立競技場を中心とした第68回全国高等学校サッカー選手権大会に出場が決まり、この快挙に地元柳川は勿論のこと、在京の同窓生も沸きに沸いて早速東京でも同窓生をはじめ関係者が一つになって応援態勢を敷き、また選手たちの受け入れ態勢を作りました。この情報も私と同期の永江秀作君からもたらされました。

この年の11月6日に永江君から電話があり伝習館のサッカー部が福岡市の平和台陸上競技場で行われた全国高等学校サッカー選手権大会の決勝戦で強豪の東海大学付属第五高等学校を4対2で破り、福岡県の代表として、東京の国立競技場を中心で開催される全国大会に出場することが決まった。これは伝習館としては久しぶりの快挙であり、しかも東京を中心に開催されることでもあり、東京同窓会として何か協力できないものか？ 検討してほしいとのことでありました。

このことについては全く異論はなく、東京同窓会として取り敢えず何かにつけ事務局のご指導を受けている古賀義利氏

に報告し、今後の対応を伺ったところ、これは古賀会長に報告し会長のご意向に従うべきではないか、僕も可能な限り協力したいので遠慮なく申し入れて欲しいとのことでありました。

その直後に同期で本校の伝習館同窓会の幹事と理事を長年に亘り勤めてくれていた本吉 湊君からも同じ報告が入って来ました。彼の話では福岡の平和台陸上競技場の会場には、父母やOB在校生ら約2千5百人が応援に駆けつけ声援を送り大変な盛り上がりであった。このことであり、更に地元では早速、同窓会が中心となって運動部のOBや父母教師会などと呼びかけて全国大会出場後援会を立ち上げる話が持ち上がっている。これは実現すると思う。また、応援団も結成されて、大挙して駆けつけるのではな

いかとのことでありました。この報らせで地元の盛り上がりかたがほぼ掴めたような気がしましたので、東京同窓会も何か対応するの必要を感じました。そこで古賀会長を本社にお尋ねして、私が今までに得た情報を詳細に報告したところ、会長も大変お喜びになり、東京同窓会としても出来るだけの歓迎をする必要がある。取り敢えず東京の同窓生の皆さんには試合の日程が分かり次第葉書でも良いから応援をお願いすることにし

たらどうだろうとのこと意向でありました。それから暫く考えられてから、しかし伝習館としては久しぶりの快挙であり東京での大会だから在京のOBとして出来るだけの応援態勢作り上げることも必要だろう。何れにしろ地元の態勢が定ま

の出場権を獲得しました。今月13日(月)に抽選会がありますので、それ以降に日程が判明すると思います。元日が開会式で試合は2日からと聞いております。試合場は東京・埼玉・神奈川・千葉と分かれるようございます。試合日程等わかりましたらお知らせ致します。その時はまた、関東支部の皆様には色々とお迷惑をおかけすると思いますがよろしくお願

い。古賀会長の意向は永江秀作君や本吉湊君に報らせ、本校が決まり次第連絡願

の御支援助の賜と感謝しているところであります。今後共よろしくお願致します。関東支部の皆様方にもよろしくお伝え頂ければ幸甚に存じます。 敬具

翌々日の11月14日に伝習館の池田重信校長先生から事務局あてに次のような依頼の手紙を頂きました。11月10日付のもので、書簡の全文をご紹介します。校長先生が在京の同窓生の協力を如何に頼りにされておられたかご理解できると思

い勝手に掲載させていただきます。 11月10日
「拝啓 秋たけなわの候、貴台におかれましては御健勝で御活躍のことと拝察致します。母校伝習館高校も歳を重ねるにつれて施設と共に内容も充実してきました。就職・大学進学も年々好成績をおさめております。放課後の部活動も盛況を呈し体育系の部は殆ど県大会までは出場している状況であります。

特にサッカー部につきましては近年頭角を現し、今年は福岡県大会優勝戦で惜しくも東海第五高校に破れましたが、沖縄での九州大会では第3位という成績をおさめました。

さて、この度、平成元年度第68回全国高等学校サッカー選手権大会福岡県大会において優勝の栄冠に輝き、全国大会へ

この日の夕方と思いますが、本吉君から電話を受け地元では伝習館同窓会を中心に「伝習館高等学校サッカー部全国大会出場後援会」が正式に発足し、組み合わせも決まり、初戦は不戦勝で、2回戦は1月3日に横浜の三ツ沢競技場で石川県代表の星陵高等学校と対戦が決まったとの報らせでありました。

後援会は当時の伝習館同窓会長・三稜会理事長江上辰之助氏を中心に組織され、副会長には校長の池田重信、父母教師会長の今村恒英、サッカー部後援会長の石橋義治の各氏が協力され、事務局に教頭の松下陽一、本校の事務長吉田喜彦、同窓会・父母教師会事務局の松尾逸史の

各氏が事務を担当され、活動を始めることとありました。柳川はこの快挙に大変な盛り上がりようで、伝習館のOBの方や大勢の皆さんから後援会への問い合わせが次々に寄せられているとのことでありました。

翌日の11月14日に再度本吉君から電話連絡があり、後援会では今回の募金額を1,000万円に定め、同窓会OB・父母教師会とも1口5,000円以上とし、募金による不足額は90周年記念事業残高から充当する。募金の目的は選手の大大会出場費用の補助・祝勝会並びに壮行会・後援会の広報活動等の経費に当てられるとのこととありました。

これを受けて私は東京同窓会も古賀会長のご意向どおり、応援や選手達の受け入れ態勢を作り上げる必要を感じ、急ぎ古賀会長に面会し、地元では後援会が発足し、本格的な活動が始まった旨、詳しく説明いたしました。

会長からは地元の伝習館や後援会と良く連絡を取り合い東京同窓会として最大の受け入れ態勢を作り上げて欲しい。また受け入れの方法等については君達に任せるから、原案が固まったところで、僕に相談するようにとのことの指示を受けました。

事務所に戻り、早速、永江君・田中禮二君にご足労願ひサッカーの受け入れ態勢について古賀会長の指示を説明し、東京同窓会としての受け入れ準備等、その方法について打ち合わせを行ったが、何しろ準備期間が殆どなく、後援会を発足させ、受け入れの資金を確保する為の募

金活動に関する同窓会OBに対する趣意書の作成、名簿の整理・確認、郵便、または銀行の振込用紙の準備・返信葉書の作成はもとより選手の練習場の確保、また選手達の昼食手配、試合当日の応援団の結成など、思いつく対応を列挙するだけで、大変な仕事となることが分かり加えて準備に伴うスタッフが必要であり、その確保をどうするか途方にくれました。とは言え只手をこまねいて居ても前には一向に進む事はないので、取り急ぎ東京同窓会にいつも協力いただいている同窓生の方々にお願ひして伝習館サッカー全国大会出場東京同窓会後援会準備委員会を立ち上げることになりました。

準備委員会発足にあたり、渉外関係は永江秀作君あたり、事務関係と母校の後援会などの連絡は私が受け持つこととし、田中禮二君は彼の仕事の関係から無理な願ひは出来ず、無任所の立場で双方の調整役で加わって貰いました。

早速、翌日から準備委員会に携わっていたべく予定の同窓生の方々に連絡し主旨を手短かに説明のうえお願ひしたところ、全員が快く引き受けてくださいました。

特に私の相談的存在の古賀義利氏に励まされ、気力が倍增してきたように感じたものでした。

翌17日の午後6時からホテルの宴会場で準備委員会の最初の会合を開きました。参加頂きました方々は、年数が経過し私の記憶違いがあるかも知れませんが、当時の資料をひもときますと、古賀義利、江崎和夫、永江政勝、増尾義勝、

古賀 慧、永江秀作、田中禮二、沖 美津正、金子誠也、樋口誠佑の各氏と私であつたと思います。

この会合は、積極的に前向きな討議がなされ、在京の同窓生が挙げて協力する事とし、短い期間のなかで最大限の受け入れ態勢を作り上げる事に努力すること全員が一致しました。

後援会の名称は「福岡県立伝習館高等学校サッカー部全国大会出場東京同窓会後援会」と称し、実行委員会の後援会組織の原案を起案し、古賀会長の了解を得て後援会を発足させることと致しました。

この間に、伝習館の池田先生をはじめ、教頭の松下先生や吉田事務長などから地元の後援会の活動状況などの連絡を頂戴いたしておりました。

丁度、11月18日(土)の正午からホテルで第436回目の「みろく会」が開催され、古賀会長も出席されたので、会席が終了した後にお時間をいただき受け入れ態勢の企画書提出するまでには至りませんでした。が、今までの経過を報告し、なかでも昨日の夜に東京同窓会後援会発足に伴う実行

委員会を開催した旨を詳細に説明したところ非常に満足された様子でありましたが、会長から折角全国大会に出場のため上京してくるのだから在京の同窓生として精一杯の歓迎と、激励もしてやりたいので、適当な会場を探しておくようにとのことの指示をうけました。

以下次号



伝習館だより

平成19年3月進路実績

国公立大学等合格者

■主な合格先

筑波大学	2	宮崎大学	1
京都大学	1	鹿児島大学	3
大阪大学	1	横浜市立大学	1
奈良女子大学	1	大阪府立大学	1
岡山大学	1	神戸市外大	2
広島大学	5	下関市立大学	1
山口大学	3	北九州大学	2
香川大学	1	福岡県立大学	3
高知大学	1	福岡女子大学	1
九州大学	12	長崎県立大学	3
九州工大学	5	熊本県立大学	1
佐賀大学	32	防衛大学	10
長崎大学	17	航空保安大学	1
熊本大学	10	海上保安大学	1
大分大学	3	水産大学	1

私立大学合格者

■主な合格先

青山学院大学	4	同志社大学	23
慶應義塾大学	2	立命館大学	39
上智大学	2	関西大学	8
中央大学	9	関西学院大学	3
東京農業大学	10	西南大学	74
東京理科大学	10	福岡大学	117
日本大学	9	筑紫女学園大学	12
法政大学	6	中村学園大学	15
明治大学	17	久留米大学	24
早稲田大学	9	立命館アジア太平洋大学	13

公務員

■主な合格先

国家三種	1	郵政公社	1
------	---	------	---

伝習館校長着任挨拶



校長 合原長俊

このたび、定年退職されました横山定継校長先生の後任として久留米高等学校から転任してまいりました。校長として二十三代、館長としては第三十七代になります。この県南の名門進学校においてその重責を果たし、さらなる発展のために努力をする所存でございます。

江崎正直会長をはじめ東京同窓会の皆様には平素から母校の教育活動発展のためにご尽力をいただき、特に修学旅行での課題別研修に全面的にご支援いただいております。さて、高校時代は四十歳の人生の本番に向けて基礎基本を学ぶ養成の場、鍛錬の場であり、人生においてたいへん重要な時期にあたります。この時期に藩校以来の歴史と伝統を受け継ぐ伝習館で学ぶことは大きな意義があり、幸せなことだと考えます。私もは伝習生がここでしっかりと学び、大きな夢に向かって果敢にチャレンジしていくよう惜しみないサポートを行ってまいります。

同窓生の皆様には今後とも母校に対するご理解とご支援をお願い申し上げますとともに、東京同窓会のみならずご発展を心より祈念いたしております。

部活動報告

(平成十九年度前半)

- サッカー部
全九州高等学校体育大会南部予選
男子 二位 (県大会出場)
- ソフトテニス部
全九州高等学校体育大会南部予選
男子 二位 (県大会出場)
- 卓球部
全九州高等学校体育大会南部予選
男子団体七位 (県大会出場)
男子ダブルス (県大会出場)
女子団体三位 (県大会出場)
女子ダブルス (県大会出場)
- バドミントン部
全九州高等学校体育大会南部予選
男子団体六位 (県大会出場)
女子団体二位 (県大会出場)
女子ダブルス (県大会出場)
- バレーボール部
全九州高等学校体育大会南部予選
男子 五位 (県大会出場)
全国高等学校総合体育大会南部予選
男子 七位 (県大会出場)
- 弓道部
全九州高等学校体育大会南部予選
女子個人 (県大会出場)
- 陸上部
福岡県高校南部予選会
女子走幅跳二位 (県大会出場)
- 弁論放送部
高文連地区大会
放送文化部門 アナウンス部門
五位 (県大会出場) 決勝進出
放送文化部門 朗読部門
入賞 (県大会出場)
- 琴部
福岡県高文連第五次国際交流事業
日本音楽部門で福岡県代表としてアメリカ合衆国(ハワイ州)へ派遣。

福岡県立伝習館高等学校
〒832-0045 福岡県柳川市本町142番地
TEL.0944-73-3116 FAX.0944-73-6496
URL <http://denshukan.fku.ed.jp/>

先輩・後輩より

人間到る所
青山あり

旧中 56回 成清良孝

わたしは昭和二十八年三月、二十二歳のとき、故郷柳川を出奔？して五十五年になる。若い頃は誇大妄想のオプティミストだったから、不相应な大志？を抱いていたが、次第におのれの貧困な才覚がわかってきて、すでに四十年も前に、ひどい挫折感を味わった。今は東京の一隅で、零細な年金を唯一の頼りに、氣息奄々と暮らしている。

十七年前に停年退職するとき、その頃まだ元気だった弟から、
「柳川に帰ってきたらどうか」

と強く勧められたことがある。伝習館の同期の何人かも、「余生は郷里で過ごしたい」と帰って行った。その時わたしは「三十数年の空白が今度は故郷を異郷のような感触にしないだろうか。今浦島の心境になって臍を噛むことになりはしないか」と心配した。

しかし、わたしには、若いときから柳川 of 精神風土に強い違和感があり、この期に及んで柳川に帰ろうという気にはなれない。もちろん、わたしの精神構造に

も大いに問題があることは百も承知している。

初対面の人と挨拶代わりに、出身地が話題になることがある。ある人は、

「いいところですね。一度小舟で川下りをしたことがありますよ。川のほとりに次々に展開する風物は実に情趣豊かですね」

と親近感を示される。そのたびにわたしは、「通りすがりの人にはいいところでしょう。しかし、定住するとなると、話は全く別です」

にこりともしないで、決めつけるように言うのと、怪訝な顔をされる。

わたしは福岡の師範学校を出て、いきなり都内の公立学校で教員生活をスタートした。大過小過を間断なく繰り返しながら、何とか停年まで勤めた。まわりのまれに見る寛恕の賜物と感謝している。

ことほどさように、わたしはぐうたら、教員の典型だった。別に卑下しているわけではない。事実をありのままに述べている。

しかし、どういうわけか、多くの出藍の教え子には恵まれている。最近のそれら教え子との交流を二つほど書いてみる。

北海道大学医学部大学院教授のT君。五十六歳。東京へ出張するとき、たまに連絡してきて、「一杯飲みましょう」と言う。

T君は、国会図書館の情報を検索して、わたしの著書のほとんどを所有している。医学部の教授にどういふ効用があるのか、『小論文の実践』という大学受験

の参考書まで持っている。その中の項目の一つに「医療問題 傾向と対策」がある。

「あんまり人をからかわないでくれよ」

とわたしは笑いながら言った。

七月下旬に新宿で飲んだとき、時々、医学部教授仲間の三人で連句をやっている、という話だった。

連句をやっていて、その中の一人がちよつとでも行き詰まると、待っていましたがとばかりに即座に連句は中止、そのまま酒盛りに切り替わる。

「手際がいいね。初めから目的は連句より酒盛りか」

「でも行動がフレキシブルでしょう」

とT君は笑った。

わたしが俳句を多少たしなんていることを知っているT君は、

「先生の最近の自信作を披露して下さいよ」

と、しつこく要求する。

「自信作じゃないが、自分で気に入っている句はね……」

食み出しの生き方ばかり枝を切る

を誦すると、T君はこともなげに、

「それ、川柳ですね」

と言いやがった。その夜は少しばかり悪酔いした。

わたしは正規の勤務年限三十八年間のうち、丁度半分の十九年間を、新宿にある職場で過ごした。わたしにとって新宿は第二の故郷のような思いである。年をとると、都会の雑踏がわずらわしくなる、

と言われる。でも、さいわいなことに、わたしは大都会の巨大なエネルギーが渦巻く新宿の街を歩くのが大好きだ。一週間も歩かないと禁断症状が出る。

若い頃、四年間だけだが、歌舞伎町を学区域にもつ区立大久保中学校に勤めていたことがある。その十五回生を三年間クラス担任したが、彼らも間もなく還暦を迎える。

十五回生の連帯感は驚くほどで、毎年花見から始まって、暑気払い、忘年会と銘打ち、同期のK君の四谷の居酒屋を借り切って宴会を開く。土曜日の二時から始まって、延々四時間はつづく。

いつも案内をくれるので時折り顔を出すが、この前は八月中旬だった。常時、四十名ぐらいは集まる。半数ぐらい女性である。

そのときは顔を出さなかったが、大久保中学校で二年、三年と担任したクラスにO君という人がいた。

O君は都立新宿高校を経て、東大法学部を優秀な成績で卒業、警察庁に入った。とんとん拍子に出世。警察庁のある部長だったとき、クラス会で酔っぱらったわたしを家まで送ってきてくれたことがある。家内から、

「ただでさえお忙しい警察のお偉いさんにとんだ世話をかけて……」

とおこられたことがある。

その後、兵庫県警本部長、警視庁副総監、警察庁刑事局長を経て、二年前から国立国会図書館専門員に向向している。同期はみんな退職しているが、本人は依然として公務員のままである。

九月下旬、O君から久しぶりに電話をもらった。

「家を建てたりしていて、ご無沙汰しています。いちど国会図書館の方へぶらっとお出かけになりませんか。中をご案内しますよ」

「今はシーズン・オフだけど、大学入試の解答解説の仕事では出典探しによく行くよ。電話で検索をお願いして、出かける。単行本でも雑誌でも、タイトルさえわかれば、探し出せないことはまずないからね」

「昼食をご馳走しますよ。あのあたりの店をいくつか知っていますから。最近東京法令出版から『捜査指揮』という本を出しましてね。結構売れていて、印税も思ったよりたくさん入りましたしね」

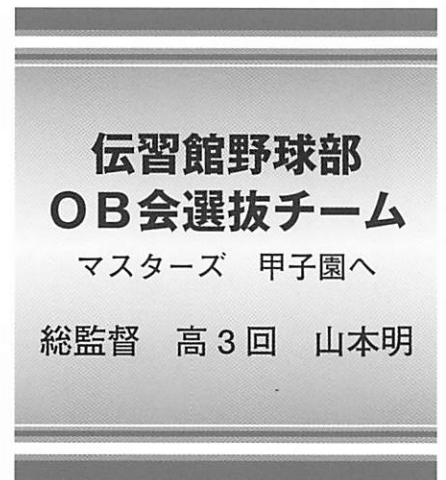
「そうか、それなら思い切り豪華な昼食をご馳走して下さい」

と言ったものの、教え子にたかる教員根性のさもしさがちらっと脳裡をよぎって一瞬ひるんだ。

O君は来年あたり退職して、入庁の頃司法試験をパスしているので、司法修習生を経て、弁護士になると言う。

柳川へ帰ってしまったら、七校勤めた学校の同僚や教え子との交流はまちがいになくなくなるだろう。今さら帰ってみたいところで、今浦島の悲哀を味わうだけだ。

すっかり馴染んだ東京からはもう離れられない。大志は挫折したが、青山（墓場）はどう考えても東京である。



平成十八年十一月四日、五日の両日に甲子園球場において全国マスターズ甲子園大会が行われ、伝習館チームは福岡県代表として初出場し鹿児島工業高校と対戦 七回六対〇と快勝しました。

その節は、全国の同窓会諸氏から問い合わせ、激励を沢山頂きましたが特に東京高三回の代表の酒井清行氏からは「この素晴らしい快挙を是非東京同窓会会報で紹介したい」との原稿依頼がありましたので、今大会及び野球部OB会の現状なども合わせて皆様にご報告したいと筆を取った次第です。

マスターズ甲子園とは？

ごく簡単に定義づけると「高校野球のOBによる甲子園大会」となるでしょうが、全国高校野球OBクラブ連合などでつくる実行委員会が主催して平成十六年に始まり三回目となる今年は地方予選から勝ち進んできた十五府県の代表十六校

が出場し、一試合ずつ行った。

福岡県予選は、十月一日大牟田延命寺球場で行われ、伝習館は小郡高校に十五対六、祐誠高校（旧久留米工大付属校）に十二対一とそれぞれ大勝利し初出場を決めた。この大会は独特のルールがあり例えば、一チーム最低一九名でベンチ登録、その内訳は三四歳以下が十四名、三五歳以上が十五名で構成し最大五十名まで登録できる。試合は三回までを三四歳以下でプレーし、四回以降は三五歳以上で行い、一時間三十分で終了となる。その他は書面の都合で省略します。

十一月四日堂々の入場行進

四日朝八時いよいよ、開会式が始まった入場行進は、現役と同じく兵庫県警察音楽隊吹奏楽団が奏でる「栄冠は君に輝く」に乗って、さらに伝習館高校名のプラカードを掲げて先導するのは市立西宮高校のOG、共に現役と同じで心憎い演出であった。我が伝習館チームは二十歳（七三歳の五十名「うちマネジャー四名」）の堂々の入場行進であったがすでに感極まって涙ぐむ者もいた。

私も、昭和二十一年旧制中学最後の年に入学し、すぐ復活した野球部に入部して二七年卒業までの六年間甲子園を目指して、汗と涙の猛練習に耐えた当時の事が走馬灯のように脳裏に浮かんできて、目頭が熱くなった。

特に二三年、二六年、二七年、の三度決勝戦で負け甲子園を逃したことや、恩

師（野球部長）で故人の金子、小柳、の両先生、同じく故人の二四年卒の原田広士、二五年卒の山田善作、マネジャーの園田治平、二六年卒の古賀浩、二七年卒の西川次郎、古賀洋輔、二八年卒の津村（高口）学、三一年卒の鶴川儀一郎の諸氏の思い出が頭を交錯して大粒の涙が甲子園の土にポトポトと落ちた。

大会名誉会長の星野仙一氏の開会式の挨拶では、「高校三年の夏、あと一歩で甲子園に行けなかった。その時の悔しさが私の野球人生としての原点。私と同じ夢を追っている仲間が大勢いることに驚き共感と感動を覚えた。」と甲子園への熱い思いを語りました。



撮影 石野明子氏

内村末治 副主将 (2列目)
堤堅吾 副代表
杉勝コーイチ (2列目)
新開成美 監督
原田政行 代表
山本明 総監督
私立西宮校 O.G

甲子園 初出場・初勝利を飾る

十一時三十分、対鹿児島工業戦の開始である。バックネットには、選手の家族や友人・同窓会関西支部の福山支部長をはじめ、多くの応援者がつめかけた。

ベンチでは、若手組と年寄り組、マネジャーが一体となってベンチを盛り上げベンチ入り五十人のほぼ全員が、何らかの形で試合に出場するなど、全力を尽くした。特に二回終了後、地元高校女子ブラスバンドによる伝習館校歌「星座よ輝け」の演奏には、五十人全員がベンチ前でスクラム組んで大合唱して選手の士気を鼓舞するなど、まさに、総力を挙げての甲子園初勝利であった。

試合経過

一回裏、伝習館は、四死球などで無死満塁から先発投手で四番の横山（信）（平二年卒）が、ライト前タイムリーヒットを打ち二点を先取。その後も、犠牲フライと八番平田（平二年卒）のライト線二塁打で、一挙五点をもぎ取った。

二回にも、三番古賀賢（平十年卒）のライトオーバー二塁打と犠牲フライで一点を追加し、六対〇として三イニングまでの若手（三四歳以下）が投打に圧倒し四イニング以降の年寄り組（三五歳以上）にバトンタッチした。

五回には、竹松（昭五四年卒）が右中

間三塁打を放ったが得点できず、その後も、両チーム投手の好投で得点はなかった。年寄り組で特に光ったのは、古賀直（昭六三年卒）千田（昭六三年卒）下川（昭五八年卒）久良木（昭四九年卒）の見事な投手リレーと守備面ではセンター後藤（現役野球部コーチ）の超ファインプレー、本木（昭四八年卒）捕手の見事な二塁封殺、二ツのダブルプレー、など野手陣の堅守で完封した。

野球部OBの現状

伝習館野球部は、明治四三年の創部で約百年の歴史を持っているが、OB会の歴史は、今年で創立十年と非常に浅い。平成九年現野球部監督の佐藤利治君（昭五二年卒）の監督就任を機にOB会を結成した。初代会長は、奥井醇吉君（昭三七年卒）、二代目は、私（山本）が十一年〜十五年まで、三代目は原田政行君（昭三二年卒）がそれぞれ就任している。現在、OB会員として、名簿に登録している人数は、最年長の昭和二十四年卒の大坪正廣氏、古賀隆利氏、吉村（石崎）典雄氏、以下約五百名にのぼるが、全国から、援助と激励を頂いている。

OB会会則の「会の目的」として
一・伝習館高等学校野球部を後援する。
二・会員相互の親睦融和を図る。

を掲げているが、その目的を達成するため、年会費として一人三千円をお願いし、学校（野球部）に毎年二五万円の寄付を行っている。その他必要に応じ予算

の許す限り援助している。会員相互間の親睦については、毎年六月に開催する総会その他の会合などで野球部独特の先輩後輩間の秩序を保ちながらも実に和気あいあい事にあたっていると確信している。ただ、大変残念な事は、現役野球部の実績が皆さんのご期待に全く応えていない事である。今回のマスターズ甲子園出場が、現役野球部の大きな刺激になり、文武両道の方針のもと、尚一層の奮起に繋がる事を大いに期待したい。

東京同窓会の皆様

この素晴らしい伝習館東京同窓会会報に私の拙い文章を掲載して頂きまして誠に有難う御座いました。

今後とも伝習館野球部並びに野球部OB会にご後援下さいますよう、心からお願い申し上げます。

野球部OB会役員名簿

会長	昭三一年	原田政行
副会長	昭三八年	堤 堅吾
副会長	昭四三年	内村末治
総務長	昭五三年	真崎康介
総務	平 一年	石橋尚次郎
企画長	昭四八年	大淵博己
企画	平 三年	田島正勝
HP長	昭四三年	山口雅克
経理長	昭四八年	横尾雄二
経理	平 四年	野田公裕
渉外長	昭五十年	牛島祐士
渉外	昭六一年	太田 豪
広報長	昭五四年	武松直紀
広報	昭五十年	是松春美
庶務長	昭五三年	石橋正次
庶務	昭五七年	国武典子

監査役 昭三二年 新開成美
 監査 昭六十年 江島武幸
 顧問 昭二五年 内田 勝
 顧問 昭二六年 佐野雅和
 顧問 昭二七年 山本 明

支部長名簿(地区別)

柳川 昭三七年 奥井諄吉
 みやま 昭五一年 野田栄作
 大川 昭四一年 河村晴次
 三瀧 昭三五年 石川興文
 大牟田 昭三二年 高井良四男美
 久留米 昭二七年 野田治彦
 福岡 昭二九年 山下昌則
 北九州 昭二九年 山下昌則
 関東 昭三一年 野林 修
 その他 昭五三年 真崎康介

マスターズ甲子園ベンチ登録者名簿

卒年 氏名 守備 会役職
 昭二七 山本 明 総監督 顧問
 昭二七 杉 勝 コーチ
 昭三一 原田政行 代表 会長
 昭三二 新開成美 監督 監査役
 昭三八 堤 堅吾 副代表 副会長
 昭四一 河村晴次 支部長 支部長
 昭四三 山口雅克 事務局長 H P長
 昭四三 内村末治 副主将 副会長
 昭四三 石橋邦男 投手
 昭四四 酒見隆司 事務局 事務局
 昭四五 津村生二 助監督 助監督
 昭四八 本木正之 捕手
 昭四八 大淵博巳 事務副長 企画長
 昭四九 久良木文博 投手
 昭四九 有座祥子 マネジャー
 昭五十 是松春美 チーフマネ 広報
 昭五十 古賀哲二 外野手 外野手

昭五十 牛島裕士 副会計 渉外長
 昭五一 野田栄作 外野手 支部長
 昭五一 原 高啓 内野手
 昭五一 中島嗣郎 外野手
 昭五一 堤 賢哲 内野手
 昭五一 相島壽美子 マネジャー
 昭五二 佐藤利治 内野手 現役監督
 昭五四 武松直紀 内野手 広報長
 昭五五 後藤誠二 外野手現役コーチ
 昭五七 国武典子 マネジャー 庶務
 昭五七 山田浩隆 内野手
 昭五七 山田信子 マネジャー
 昭五八 下川泰伸 投手
 昭五八 古賀康弘 内野手
 昭六十 江島武幸 主将内野 監査員
 昭六二 兼子孝治 捕手
 昭六三 千田正浩 外野手
 昭六三 古賀 直 内野手
 昭六一 横山 司 内野手
 昭六一 石橋尚次郎 副将外野 総務
 昭六一 二平田充考 外野手
 昭六一 二佐藤元昭 内野手
 昭六一 三横山信也 投手
 昭六一 三田島正勝 内野手
 昭六一 五金子知史 捕手
 昭六一 六阿志賀浩一 主将内野
 昭六一 六椎葉幸司 内野手
 昭六一 八田中健太郎 内野手
 昭六一 八新谷雄一 内野手
 昭六一 十古賀健太 副将内野
 昭六一 十倉重祐子 マネジャー
 昭六一 十一塚本浩二 内野手
 昭六一 十二野田武男 外野手
 昭六一 十二武藤真理 マネジャー
 昭六一 十三吉川勝也 捕手
 昭六一 十四井手口潤也 外野手
 昭六一 十五中島修一 内野手

— 60年目の再会・天国の
 メッセージへ捧げる鎮魂歌—
 永江 秀作君を悼む—— (寄稿)
 ——透明な気と気が触れ合ったような
 ただそれだけのよう(茨木のり子)——
 高5回 黒田左右太

それは1月7日の昼下がりのこと。私は自室に一人の珍客を迎えていた。中学・高校の学友・永江秀作君である。彼の交友は中学に入ってからだから、その生い立ちについての知識はない。しかし縁というのは不思議なもの。出会いから60年目の07年。まさか弔辞を介して再び相まみえようとは。高田中学と伝習館。道は二度も交わるかに見えた。だが、その6年。二人がクラスを同じくすることは終ぞなかったのである。垣根が高いとは言わないが、どこか遠慮の先立つ同期生なのだ。しかし、そんなことに頓着しないのが、この男の真骨頂。対人関係の親交には天性の閃きを發揮する。それはもう才能といつていい。

「君の本が欲しい」。前日、予告した通り彼は漂然と現われた。一通の封書(発信人・伝習館の恩師・石橋敏男先生)と一冊の「螢の写真集」(栗林慧氏編)を携えて……。

「本」とは、前年2月に上梓した拙著「サギソウものがたり」のことである。

2月4日に開催予定の伝習館の在京の同窓会に出席するという。会員への手土産にしようというのだ。嬉しいかぎりである。(昨年5月、伝習館5回卒の同期会の折も同じ役回りを依頼した経緯がある。恩師の書簡もその間の事情を伝えている。)重ねての恩義である。

「俺も脳には問題があるのだよ」。挨拶もそこそこに口火を切ったのは帝大卒の英才。

同病相憐れむ? 客人は主を驚かせるほど能弁だった。脳卒中の後遺症を抱える主側の気遣いを回避させるための冗言のようだった。

「医者に、恋をしると言われている」。畳み掛けるように繰り出される唐突の話題。内容から判断して、ウツ病の症候か?

「早寝の夫が深夜に電話を寄越す」「ソウの傾向が出ていたようです」「虫の報せか、親しい人たちの間を訪ね歩いていたのでしよう」(上京中を急遽、帰省した夫人の証言)

大詰の場面に臨もうとする故人の姿が断片的に輪郭を現し始めたのは事後のことである。

「螢の方は?」の問いに、我が意を得たりと客人の積年の蘊蓄がその後の会話の主導権を握ったのはいうまでもない。積もる話は一筋縄では括れない。息も継がせぬ客人の弁舌に小休止を打たせたのは一曲の「歌」だった。

返してほしい
あの幸せを

やさしさに満ちあふれ
愛を育て身を寄せ
歩いた頃のように……

23年前に制作した自然音と音楽で綴った環境音楽『ふるさとの水音』の中の歌（『サギソウものがたり』の挿入歌）である。書棚の奥から引っ張り出した49歳の男が歌った音源テープを聴きながら、客人は泣いていた。学生時代。映画作りに携わっていたらしい。創作者的発想は学生気質の延長線？ 音楽の説得力は生々しく、直線的だ。昔とった杵柄。アーティストック・インプレッションに火を点けられたのだろうか。

「年のせいかな涙脆くなってね」。照れ隠しのようにその場を取り繕う客の声を聞きながら、思わず貰い泣きする主の男。7日正月の明るい日差しが差し込む部屋の片隅、恥も外聞もかなくなり捨てた老人が二人。録音機器を挟んで迎り憚らぬ滑稽の図が展開されていた。

「アンタには、もっと早よう、おうとかやんやった」。阿吽の呼吸。どちらからともなく発せられた嘆息の声は読経の斉唱さながら、主客共々のふるさと言葉だった。

——透明な気と気が触れ合った、と感じた瞬間である。

「プロパガンダは俺も苦手」と意気投合する慎みのジェネレーション。

「ひよっとしたら今ごろ、メガホン片手にガナっていたかもしれないのだよ」。

「映画制作」を言っているのだ。モノ作りの同類意識。忌憚のない対話は堰を切

った奔流の勢い。

「酒が飲みたいなあ」と呟く客を前に「飲みたいなあ」と首肯く酒断ちの病人。（客の帰路の運転が脳裏を過る。）酒さえあれば、鬼に金棒だ。後は野となれ山となれ。酒の効用は言わずもがなの元・酒場の亭主なのだ。

「この本は放ってはおけない」。あの謎掛詞はいつたい何だったろう。2千7年は亥年。年男の迎春である。期するものがあつたはず。何かが始まつたはずである。あの日、なぜ彼に酒を飲ませなかったのだろう？ 日時を改める時間さえ二人の間には残されていかなかったというのに……。覆水盆に還らず。あの時間はもう永遠に戻らないのだ。

「先日は長々とお世話になって……」。旅人との最後の会話は翌週の週末。熊本の山中からだという携帯電話から響く快活の声だった。悪い予感が走ったのはこの時だ。

「七山村がなくな

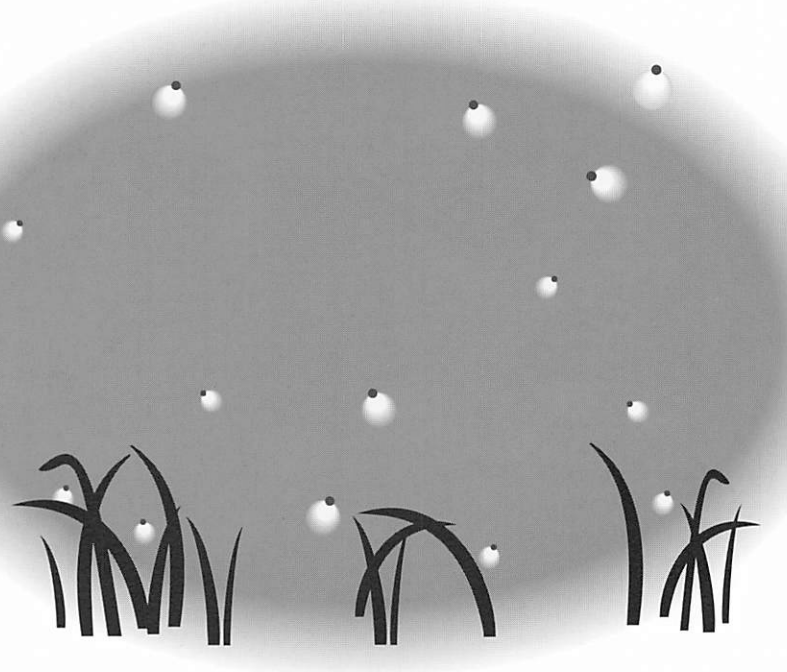
っている。いくら検索しても出てこない」。06年1月1日。市町村合併で七山村は唐津市に編入され村の区分は消滅した。（この情報は周知の事実。待てよ。）「オイ！ まさか君は運転しながら電話してるんじゃないだろうな……山道は危険だ。すぐ車を停めて話すんだ」。胸騒ぎが放たせた咄嗟の怒声だった。そして異変は、さらに翌週。来訪から僅か3週

目の週末のことだった。予感が、あんな形で現実のものになるとは……。今となって、せめてもの慰めは「俺も楽しかった。この年になって、やっと本物のサムライに出会ったと感じたよ」という本音を滑り込ませることができたことである。

七山村く久木野村く鹿見島。まるで写真集の蛍の明滅さながら、死出の旅路を明く彩りながら音もなく翔んでいった愛すべき我が同胞。カッコ良すぎる、なんて不謹慎だろうか。

あの日、君が運んでくれた恩師の書簡とあの写真集が今も私の座卓の上で、あの日のことを語れ！ と半身不随の男を励まし続けている。病歴を以て基準とするなら、こちらが先輩だ。順序が違うはず。叶うものなら今一度、あのバイタリティの塊のような好男子を現世に呼び戻したいと願わずにはいられない一匹狼ではある。風雪いく春秋。伝習館を巣立ち袂を別つてなお久しい歳月。だが、君を語るのに私の持ち合わせている知識はあまりに貧しい。君と過ごしたあの5時間（夫人さえ知らない）を語ることで弔辞に代えるものである。Yesterday when I was young. ホタルが翔んだ。ふるさと帰還兵1号と2号。これから二人が始めたであろう人生最初で最後の共同作業。それがいったい何であったか。夢の片割れとなった今、その後先さえ知る手立てはない。

友よありがとう。夢路やすらかに……。



知られざる 柳川の星

高6回 岡田哲也

次のお名前のうち、何人ばご存知かも？ そうして伝習館で学んだ方々で、みんなご存知なら、あなつつあんな、かなりの柳川通ばんも。

足達八郎、十時撰津、曾我祐準（すけのり）、石川登喜治、大澤三人（みしお）、そして木村峯子。（文中敬称略）

★ ★ ★ ★ ★

柳川は宗茂公以来、尚武の気風が強かった。このため江戸期を通じ多くの剣客や弓槍の達人を産んでいる。剣術の代表格は幕末の三劍客と称せられた大石進で、槍の名手はさしずめ足達八郎ではなからうか。相撲では、伝習館の先輩ではないが、ご存知、藩お抱えの名横綱、雲龍がいる。

足達八郎を久々に思い出したのは一昨年、杖立温泉に遊んだ時である。

湯治のため、病身の母を背負って柳川からやってきた八郎は、鍋島藩の悪侍たちに襲われかけた日田の娘をかばったために恨みを買ひ、やむなく近くの丘で果

し合いをすることになる。

八郎は日田代官所の役人たちの立会いのもと、六人の敵を突き伏せ（一部は逃亡）、正義と柳川藩の名譽を守る。

宿の主に訊いて決戦場を訪れてみた。谷川の細い流れに沿って暗い樹間のだから坂を登ると意外に狭い、学校の教室ほどの空き地に出た。片隅に古い記念碑が建っている。

（柳川から歩いてくっただけでん大ごつとに、おっかささんばかろうてお出でめしたとは…と傍らの妻を見ながら改めて感心。因みに妻は五十三キロ、どうでんよかバツテン）

★ ★ ★ ★ ★

この足達八郎や大石進を伴い、幕末の動乱期に藩命を帯びて度々上洛し、柳川の名を高からしめたのが家老十時撰津と弟親雄（立花菫岐）の兄弟である。二人とも剣術は不得手だったが、いずれも頭脳明晰、弁舌抜群の俊才で、隣国肥後の長岡監物や横井小楠と親交があり、日本の将来について高い識見を持っていた。

撰津は勝海舟、大久保利通らと談義を重ね、慶応三年十一月九日には土佐藩の後藤象二郎と共に二条城で將軍徳川慶喜に拝謁して朝廷と幕府の調停を試み、遂に翌十二月、岩倉具視や西郷、大久保らと協力して大政奉還に持ち込むことに成功する。（維新の功臣は有名人ばかりじゃなかったとす）

一昨年秋、靖国神社の遊就館で「日露戦争百年展」を見学した時、「明治維新」のコーナーに「明治新政府の閣僚名簿」

というパネルが目にとまった。総裁（首相）有栖川熾仁親王、副総裁（副首相）三條実美、岩倉具視に続き参与（大臣）として西郷隆盛、大久保利通、西園寺公望、後藤象二郎らに伍して十時撰津（柳河藩士）とあるではないか。

公家でも藩長土肥でもないのに登用されたのは、やはりその識見・手腕と、一命を賭して回天の大業に奔走した貢献が認められたものであろう。撰津の論文、手簡や岩倉公から拝領した小野道風の書など数十点が十時家から柳川公文書館に寄贈されている。道風の書は小品ながら、息を呑むような名筆で、さすが本朝の三蹟と感嘆させられる。

★ ★ ★ ★ ★

曾我祐準は坂本町生まれで、撰津より十八歳若かったが、近所同士でもあり、お互い熟知の間柄であったものと思われる。文武両道に秀で、藩内屈指の逸材であった。若くして長崎に留学し、洋学に接して悟るところあり、国禁を犯して上海に渡り、その後香港、シンガポールなどを歴遊して海外事情と航海術を学ぶ。

明治初年の戊辰戦争の際は柳川藩の汽船千別丸の艦長として従軍し、その後政府の海軍御用掛に登用されるも函館戦争後、求められて陸軍に移籍する。逐年累進して明治七年、陸軍士官学校の初代校長に任命される。

祐準の九十二年の長い人生の中でも、恐らく最大の出来事は西南の役だったのではなからうか。第四師団長として薩軍と激闘を重ねたが、官軍が西郷隆盛を城

山に追い詰めた時、とどめの総攻撃を命じられたのが第四師団である。

既に西郷軍の最期は時間の問題であった。戦いで敵將を討ち取ることは武人として最高の名譽だが、なぜこの役目が祐準に与えられたのか。

司馬遼太郎が小説「翔ぶが如く」の中で書いているように、朝敵の汚名を着せられたとはいえ、維新最大の功臣であり国民的人気も高い西郷を討ち取ることにためらいがあったため、非薩長人の祐準を起用したものらしい。このときの祐準の心中は察するに余りあり、役目とはいえ生涯忘れがたい辛い出来事であったかと思う。

祐準はその後陸軍中将まで栄進するが「もし藩閥の出身ならば間違いない陸軍大将になったであろう」と言われていた。その埋め合わせでもないであろうが、子爵を賜って華族に列し、退役後は東宮太夫として皇太子時代の大正天皇の扶育に任じている。

因みに前述の十時撰津にも授爵のお沙汰があったが、「国事に奔走せし志は一身の榮達にこれなく」として固辞した。素直にいただいておればよかったものを、と孫の十時惟親老が苦笑交じりに述懐しておられたのを覚えている。確かに、華族年金だけでも莫大だったに違いない。

坂本町の生家跡（市民会館西南隅のあたり）にあった祐準の顕彰碑は戦後撤去され、跡形もないが、天叟寺の墓碑は健在である。

（去年、墓地整理るとき、見えんごつな

ったけん、お墓までふ捨てられたかと思
うて悲しかったばってん、今年元んとこ
さんお直りめしたけん、ほっとしたばん
も)

★★★

時代は下がって昭和十六年十二月八
日、「ニイタカヤマノボレ」のハワイ攻
撃命令を発信したのは聯合艦隊旗艦長門
であった。この弩級戦艦の設計者の一人
が海軍技官石川登喜治である。

石川家は代々、沖の端水天宮の宮司だ
った。因みに登喜治は白秋と家も年も近
く、(矢留)小学校と中学伝習館の同窓
なので、熟知の間柄であつたらう。氏に
は生前何度もお目にかかったのに、白秋
の思い出を聞いておかなかつたのは心残
りである。

伝習館時代は先生方も舌を巻く秀才
で、卒業後五高を経て、東大に進み、在
学中に海軍に採用されて英国留学。帰国
後は軍艦の設計・建造に携わり、その多
くは世界的名艦と称えられた。建艦事業
の功により海軍技官としては最高位の技
術中将まで登り詰める。

軍艦長門は戦後まで生き残つたばかり
に、昭和二十一年ビキニ環礁で行われた
原爆実験の標的艦にされた。

実験前、お姫小路の小宅に来訪された
登喜治老は亡父と対談中、「私の計算で
は長門はこの原子爆弾では沈まない」と
断言された。後年知つたことであるが、
爆心付近にあつた長門は艦上構造物が大
破したものの傾きもせず、原爆投下後も
氏の予言どおり悠然と浮かんでいたとい

う。この経緯は阿川弘之の「軍艦長門の
生涯」に詳しい。

余談ながら氏は戦後、早大教授に招か
れて上京するまでの数年間を久留米に旭
製鋼会長として同地で暮らしたが、この
間二つの不幸に見舞われる。

最初の災厄は終戦直後の強盗事件であ
る。深夜、女中のただならぬ悲鳴に、玄
関に駆けつけると、賊が出刃包丁を振り
回していた。とっさに組み付いたが女中
さんは絶命、氏も重傷を負われる。「石
川中将は恩賜の金杯三つ重ねば持つとん
なざるげな」という地元の噂が災いとな
つた。

二回目の災難は水害である。昭和二十
八年六月末、連日の豪雨で筑後川の水嵩
が増した。危険を予期した氏は家の屋根
に上がり、梯子から夫人を引き上げたが、
まさにその直前に堤防が決壊し、泥水は
軒に迫つたという。柳川も被災し、伝習
館を含め学校はすべて休校になつた。
「泥海に沈む筑後地方」という大見出し
と航空写真つきの新聞記事をご記憶の方
も多いに違いない。

★★★

お花から福厳寺に通じる道に、大澤眼
科医院があつた。お堀を挟んでお花の森
に面し、お堀の支流にかかる小橋は大澤
橋と呼ばれている。

お花を巡る本流は鬱蒼たる樹木の陰に
なつているため、夏でもぞっとするほど
水温が低く、一方大澤橋から先の支流は
日当たりが良いので暖かつた。この本
流と支流の分かれ目あたりを人々は「み

すみ(三隅?)」と呼び、子供たちに固
く遊泳を禁じた。

「あそこんにきで泳いだらの、河童に尻
ば抜かるるばい」というのである。思う
に水温の高い支流から大澤橋をくぐつて
お花の裏手に泳ぎ入ると、急に水温が下
がるため、心臓麻痺を起こした子がいた
のであろう。

院長の父上が伝
習館の先輩で、教
頭も勤められた大
澤三人である。氏
は伝習館卒業後ア
メリカに渡り、ボ
ストン大学大学院
に留学された異色
の教育者だつた。

伝習館卒業生たち
の多くは、郷土に
これといった勤め
口がないため、大
牟田などに移住し
て工員として低賃
金に甘んじるとい
う状況であること
を憂い、実学を修
めて高給の事務職
員となる道に進ま
せたいと願つてい
た。

大牟田市商業学
校(現大牟田商業
高校)に在職中、
一念発起して全国
各地の伝習館出身

者を歴訪して浄財を募つた。白秋にも協
力を依頼したといわれる。奔走の甲斐あ
つて遂に昭和十六年、大澤家に程近い立
花家図書館「対山館」を仮校舎として、
柳川商業学校(現柳川高等学校)の創設
に漕ぎつける。翌年本城町に本校舎が建
設されるが、三人はその完成を見ること
なく病没した。



伝習館に寄贈された作品「希望」と木村(松本)峯子さん

必ずしも知られてはいないが、母校は平成の現代においても、後世に名を残すような人材を輩出し続けている。六回生では書家の木村（松本）峯子がその一人であろう。幼少から父上に習字の手ほどきを受けていたが、小、中、高を通じて優れた指導者に恵まれたのが彼女の幸運であった。この幸運は結婚・上京後も続き、美智子妃殿下の書道の師でもあった熊谷恒子や毎日書道会常任顧問で日本書道美術院理事長飯島敬芳の指導を受けることになる。

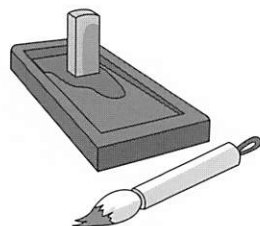
こうして峯子はかな書道を極め、「松峯」の雅号で毎日書道会や日本書道美術院の日書展など国内最高の書道展に連続入賞し、一流の書家に成長するが、これで満足しなかったことがその後の大成につながった。文字を書く書道から、心象を描く「墨象」の世界に進んだのである。

「おはよう」「ありがとう」などの言葉や、「愛」「平和」などの概念を書き表す手段が文字で、形や意味を学べば誰でも読み、理解することができる。

これを筆墨で美しく芸術的に書くのが書道であろう。

これに対し「墨象」には決まった形はない。あるのはただ心象だけである。心の叫びを、ひらめきを、墨で一気に表現したもの、それが峯子の「墨象」なのだ。文字という障壁がないこともあり、外国人にも理解されやすい。

ルイ十四世時代に創設され、三百四十年の歴史を誇る世界最大・最古のフラン



ス芸術家協会「ル・サロン」の公募美術展に出品したところ、三年連続で入選を果たし、協会の永久会員に推されるまでになった。この協会の会員には、ミレー、ルノワール、セザンヌ、マネ、モーパッサン、ロダンなど歴史上有名な芸術家が名を連ねている。

彼女の作品はフランス、スペイン、モナコ、チェコ、オーストリア、タヒチ、中国、カナダなど多くの国々でも受賞を果たし、各地の美術館に収蔵されており、「美術年鑑」では最高額の評価を受けている。

伝習館にも「希望」と題する作品が寄贈された。希望を持って人生に挑戦してほしいとの願いが込められていて、母校の後輩たちには何よりのはなむけであろう。柳川市には「平和への叫び」が贈られ、あめんぼセンターに飾られている。どの作品もじっと見ていると心に響き、元気が湧いてくるような不思議な感覚にとらわれる。

思うに彼女の墨象は、書と造形という父母から産まれた、魂の輝きという星の王子様、というのが小生なりの感想である。同期の星、峯子の名作で世界を照らし続けてほしいものだ。

方言・表現・イントネーション

高7回 田中敬之助

『セ』と『シエ』

大学一年の始めのころ、私は人前で喋ること、なった。最初は良かったのだが、途中でみんながどっと笑った。自分では何故笑われたのか、さっぱり分からない。後で、はやく仲良くなった友人に聞いてみた。「君は先生のことをシエンセイと言っただろう。それだよ。」自分ではセンセイとちゃんと言ったつもりだったが、そうだったのか。

以後、セとシエには、気を付けることにしている。(何い！それはお前だけだ。大前研一だって小学生の頃、九州から東京に転校した時、このセとシエとで笑われたと言ってるぞ。)

柳川くんもんは東京に出て来たら半分の人は笑われると覚悟しておくことだな。

セ? シエ?

柳川弁は外国語?

数年前の話、テニスの松岡修造さんに女性アナウンサーが問いかけた。「松岡さんは慶応高校一年の時、もう既にテニスで有名だったですよ。それなのにどうして柳川高校へ転校されたのですか?」

「あの頃、慶応のテニス部では麻雀が流行ってしまって私もあまり込んでいません。これはいけないと気が付き、テニスの盛んな柳川高校へ転校しました。」

「でも、卒業の頃、またアメリカへ行かれたでしょう。言葉のほうは大丈夫だったのですか?」「ええ、大丈夫だったですよ。柳川の言葉が外国語みたいなものだったから、もう慣れていました。」

柳川弁は英語的な表現

誰かが、あなたを迎えに来た時、あなたは、「はあーい、すぐ行きます。」と答えるでしょう。これが、英語では違うんだ。英語では、「Will go」ではなく「Will come」なのである。そうか、柳川ではそんな時、「すぐ来ます。」と云うから英語と同じなんだ。

また、柳川弁には「おろ良か」と云う表現があるが、この「おろ」と云う表現は一般には余り使われていない。ところが、英語には a little とか a few とかの表現があり、柳川人には訳し易い。

とととと

漫談家の団しん也という人が云っていた。「九州では、同じ単語を三つ並べれば言葉になる。『とととと』と云うんです。どう言う意味か聞いてみたら、その場所は、私が先に確保している場所だから、あなたに勝手に入り込んで貰っては困ると云う意味らしいです。もう、びつくりしました。」

それ、おかしいよ

東京へ来てははじめの頃は、ことばの表現で笑われたことが多かった。今でも覚えてるのは次の3つである。

①「この時計急いどるよ」

時計が急ぐのか。進んでいるだろう。

②「持つてはつていく」

なんだ、その「はつていく」と云うのは？「持つていく」とはちょっと違うんだよなあ。

③「10時5分前」

10時前5分だろう。

自分では、おかしいなんて思ったこともなかったのだが、言われてみれば、そうかなあーである。

なおしつて

昭和37年、ブリヂストンでは民族の大移動が行われた。つまり、技術部門の大

半が久留米から東京小平へ大移動したのであった。私もその中の一人であるが、私なんか久留米弁と柳川弁とは違うとはいえ、そんなに苦労することはなかったが、迎え入れた小平の女子事務員たちは大変だったそうである。

みんなが、平気で久留米弁で喋る。早く久留米弁を覚えるということであろうが、そう簡単ではない。傑作なのは、ある課長が作業靴に履き替え、今まで履いていた靴を差し出し、「これ、なおしつて」と云ったとか。女子事務員は、金も渡さず直せ（修理）と云うのかと悩んだとか。

喋れないだけ

娘が高校生時代、副読本として遠藤周作先生が書かれた「沈黙」という本を読むことになったそう。この小説は切支丹禁制の鎖国時代に三人のポルトガルの祭司が長崎に潜入し、間もなく捕らわれ、苛酷な拷問を受けたという話であるが、娘が云うには、「友達みんな方言が分からない、分からないと云っていたよ。」「で：お前は分かっていたのか？」「私は分かるわよ、お父さんいつも方言使っているじゃん。ただ、喋れないだけよ。」ごもつともです。

しゃつぱ

これは、私が居合わせた訳ではない。

聞いた話であるが、ご紹介する。

柳川出身の友人たち三人が、東京のすし屋に入って飲み食いしていたそう。「へい、お客さん、次ぎ何にしましょう」一人の友人が答えた。「しゃつぱ」と。すし職人は、げげんな顔して云ったそう。「ああ、これ、これシャコと云うの」最近では回転すしの店がふえた。何も高い料金を払ってひとに笑われることはないか。柳川人は回転すしで我慢せんの。

無アクセント

柳川地方の方言を研究していらつしゃる松石安兵衛さんの著書、「柳川方言総めぐり」によると、「柳川は一式アクセント、すなわち無アクセント地域に属する」と書いてある。そう、柳川人は橋・箸・端、また、医師・意思・石、蜘蛛・雲、柿・牡蛎・垣、雨・鮎、蛸・風など区別がつかないのである。私も、ときどきアクセントが違うと云って直されたが、その時は分かっていたつもりでも、一カ月もすると、「ありや、どちがどちだったっけ」と云うことになる。小さい頃、覚えたもの（耳から入ったもの）は、そう簡単には直らないものらしい。

いっちゃん

大阪で道路舗装をやっている会社に講師として赴く。少し早めに来ていた三

四人が、なにやら話し込んでいる。

ところが、一人の男性の声が妙に懐かしく聞こえた。しばらくしてその男性が、「そらあ、いっちゃんようなか」と云うのを聞いて、もう間違いないと思った。そこで、やおら近づき聞いてみた。「失礼だけど、お宅はどちらの生まれですか？」「福岡です」「わたしや柳川」「わたしや高田じゃん」最初、福岡と云っていたこの男性も、柳川と聞いて自分は高田町出身であると訂正したのであった。いろいろ話しているうちに、「わたしや和歌山・高松など、いろいろなところで暮らしてきたけど、その地の言葉はすぐ覚えたですよ」「駄目、だめ、俺に見破られるようでは駄目だよ」

掛け算の九九

孫が掛け算の九九を覚え始めた。これは、暗記するしかないもので、私も一緒になって、九九を云って教えたつもりでいた。一週間ほどして、また来た時に娘に云われた。「ゆう（孫の名）は、パパに叱られていたわよ。『ににがし、にさんがろくでしようが』とね。」

私は、『ににんがし、にぎんがろく』と教えていたのである。どちらでも良いと思うのであるが、私は柳河小学校で習ったように教えたつもりでいたのに：：。あああ、父親対祖父、こう言う場合は祖父の負けである。

転機

高12回 村上国子

朽ち果てし小屋の框かまちに風知草
靴音聞いてささとそよめく

里山歩きの時、目にしたまゝ、を初めて短
歌にしました。二作目は

木枯しと諸共になり天を掃く
逆さほうきの櫻の大樹うめ でした。

何となく上手に出来た気がして、覇氣
のない毎日を生きがいに変えるべく、ど
こかの教室へ入門しようと思いました。
しかし、その後作ってみても虚しさだけ
が心に残り、結局ブツツン状態で進展し
ません。

六十歳も半ばになると、知人、友人、
親戚の訃報が矢継ぎ早に入り、茶飲みし
ていた近所の奥さんのウツは二年にな
り、私は大殺界に入り、無気力と脱力感
に襲われ今にも膝をつきそうになっ
ていました。

そんな時、月に一度か二度手伝って

た事務所の局長が「ちよつと検査してく
るから、留守番を頼む」と言つて即入院。
見舞いにも行かないうちに亡くなりまし
た。驚きのあまり涙も出ませんでした。
四百数名の会員がいる団体です。大まか
に仕事の内容は把握していても、四十数
年主婦業をして来た私の錆びた頭脳は、
否応もなくフル回転状態になりました。
理事会、総会、懇親パーティ、旅行会、
イベント等、仕事の切れ間がありません。
お金より時間優位でわがまゝに生きて来
た私が、責任という荷物を背負つたので
す。かつてなかつた転機です。この年齢
になつてこんなはずじゃなかつた。すべ
てをぶちまけられる結婚前から日記がわ
りに文通している友達へ「もう!! 泣い
てわめて放棄してやるウ」と、無神
経で幼稚なストレス文を書き送りまし
た。すぐに「ガンバ!! ガンバ!! お互
いガンバ!!」と明るい励ましの返事が来
ました。

ハツと目がさめました。お互いと言
うのは、直腸ガンを手術して、今は転移し



た肺の治療をしているのです。頑張る比
重のあまりの違いに、胸が絞めつけられ
ました。私のこの状態なんて粟粒にも値
しない。「まっいいか!!」の精神と、余
裕の笑顔を忘れていた。この先の命は考
えまい。あせらずゆつたり行こう。グチ
は来世で叫ぼう。生かされてきた天運地
運に感謝しよう。肉体は老いと共に衰え
て行くけど、心は徐々に充実させられる。
い、年齢して反省しきりです。

山登りの友達、鑑賞につき合つてくれ
る友、メールを交わす伝習館十二回卒の
友達もいてくれます。

今は悠々閑々、心にいっぱいお陽さま
浴びて、プラス志向でガンバ!! してい
ます。

『青春のパイプライン』

高18回 福山博彰

《第一章》

「パイプライン」という曲をご存知でし
ようか。

昭和40年前後、私が高校に在学中の頃、
シャンテイズ、あるいはベンチャーズの

エレキ演奏で大変流行り、人気のあつた
曲です。

その頃は地理Bを習っていましたの
で、パイプライン?! ああ、中東から各
地へ石油を送るあの大きな送油管のこと
だな、曲の題名としてはちよつと変わつ
てるなど思っていました。まあそう言
えは何か液体が流れている様な震えた感
じのギター音がイカしてる…と自分で納
得して、題名のこととは別に気にもしてい
ませんでした。

ところが、20年程前に音楽雑誌を読ん
でいて、これがとんでもない思い違いで
あつたことを発見しました。石油のパイ
プラインとは何の関係もなく、実はサー
フィン用語だったので。

大波が海岸に近づくにつれて上からか
ぶさり、大きな波のトンネルができる。
そのロール状の空洞をパイプラインと呼
ぶ、のだそうです。

そう言えばサーファーがその中を通り
抜けているすごい映像がよくあります
ね。なんだ、そういうことか、どうも変
だと思つたよ…。知らなければ知らない
で済む、どうつてことはない知識ですが、
昔から何か変だと思つていたが意識して
ない「謎」が一つ解けました。

《第二章》

これとは対照的に、高校時代からずつ
と訳が分からない「意識してきた謎」が
一つある。

それは1965年(昭和40年)、関
西・東京への修学旅行の際に起こつた。
私の学年は戦後ベビーブームの世代で

当高校歴代最多の全日制一学年約600名、11クラスあったが、私には実はその中に気になる女子生徒が一人いた。しかし、同級生でもなく教室も離れていたため、1年の時から近づく手立ても機会もなかった。友達と話しているところを見たり、目が合った程度のことだけで、言葉を書いたことは一度もなく、彼女の意識の中に私はいなかったはずである。アイドルみたいなもので、多少のうわさを友人からそれとなく聞いたりしてはいたが、遠くからただ黙って見ているしかない状況が続いていた。

安心して元の車両に戻ってきた時に、運悪く若い担任教師に見つかり、頭を拳骨で殴られた。ベテラン教師が、まあまあそう杓子定規に考えなくても…と取り成してくれたが、痛い代償だった。通路のゴザにごろ寝をしている間に夜行列車は京都に到着、バスで奈良のドリムランドへと直行した。ここで3時間の自由行動である。さあ、行動開始、待ちわびていた時がついにやってきた。——どこにいるかな。あれ、おかしいな？…どこだろう…？

彼女のクラスの生徒が三々五々散らばって行く中、どうも彼女の姿だけ見えないう。どうしたのか、どこかで遅れてるのか——。焦ってきた。必死になってきた。「最初に園内周遊鉄道に乗ろうよ」という親友の言葉にも生返事をして、ぐずぐずしていたらはぐれてしまった。——ゴメン、今日の俺のメインは違うんだ。アトラクションも余り見ず乗らず、探しまわっている内に3時間が過ぎた。集場所でもやっぱりいない。期待感が焦燥感となり悲壮感に変わった。先生や友達に彼女のことを聞くに聞かぬ、これからどうするか白紙だった。ただ一つ少し安心だったのは、彼女のクラスでは騒ぎにもなっていないことだった。——何か事情があり、先生も分かっているのだから、ただ一時的にいないだけで戻ってくるかも知れない。こうなったら後は嵐山か箱根か…と気持を切り替えて心の準備をした。

が、その後の旅行中、彼女は再び現れなかった。——修学旅行なんて面白くもない、大嫌いだ。もう行かない。柳川に帰ってきてから、学校で彼女の姿を見つけた。やっぱり旅行中に何かあったのだろう。私にとっては謎の失踪事件である。まるでノーアウト満塁のチャンスにバッテリーボックスに立った瞬間に突然の雨に試合が中止になったみたいだ。怒りでも嘆きでもなく、チャンスが潰された天への悔しさだけが残った。

《第三章》

二十一世紀に入った夏の終り頃、見知らぬ大分の印刷会社から電話が来た。何か良からぬ勧誘ではないかと身構えて受話器に出ると、なんでも高校の名簿作成の委託を受け、所在不明の卒業生を捜すため、全国各地に電話照会をしているとのこと。私は高校卒業後、すぐ福岡を離れたので、三十数年間所在不明になっていたようだ。そもそも名簿とか同窓会があることすら知らなかったのが驚いた。その年の大晦日に分厚い同窓会名簿が届き、大掃除の手を休めて、懐かしい名前に見入った。その中にあの「夜行列車から失踪した」彼女の名前を探したら、あった。修学旅行後、卒業するまで彼女とのコンタクトの機会は全く訪れず、言わばそのまま生き別れの状況である。夢みたいな昔が蘇り、何があったんだろうかと、今も残っている謎のことを改めて意識した。

時は平成〇年△月×日、場所は柳川御花、我々の還暦同窓会。会場には見覚えがありそうな顔がたくさん集まっている。チラチラとネームプレートを見ては、ああそうかとビールを片手に40年以上も会っていない同級生と思ひ出話に花が咲く。そうしている中、それとなく周囲を見渡し、観察する。重要な確認することがあるんだから。会場を歩き周り、次々に懐かしい顔と名前に出会い言葉を交す。——今日の私のメインは違うんだ。会も半ばが過ぎて、司会者の進行で挨拶行事が始まった。——果たして来るだろうか…。淡い期待を持つてはるばる東京から飛んで来たのだが、報われないのだろうか。「しばらく…」ポンと誰かが肩を叩いて声をかけてきた。——ん？振り向くと東京でたまに会う友人と側に女性が立っていた。「この人、誰だか分かる？…と言うより、知ってるかな」友人がその人を手で指しながら私に聞いた。——え？どこかで見たような顔…と思った瞬間、あつ、この人…。と同時に、えつ、この人?!

動揺を隠し落ち着いた素振りを見せ、かの失踪した女子生徒に自己紹介をした。

当時私を意識していなかったはずの彼女にとっては、本当に「初めまして」なのだが、私に見覚えがあるような気がす

ると言ってくれた。そこでいきなり切り出した。

「貴女のお誕生日、○月△日ですよね」

「えっ、なしけんそげなコッ知つとつとオ!」

と言いたげに彼女は若干げんな顔をしたが、ええと軽くうなずいた。

よし、はまった! 誕生日の話はすっ飛ばし、本題の失踪事件の理由を確かめに入った。

「深夜に突然激しい腹痛を起こして、途中の山口県の駅で降りてもらい、病院に入院しました」、とのあっさりした答え。

——何だ、そんなことか。何と平凡でありふれた理由なんだろう。それ位のこととは思いついていたけど。本当かよ…。青春の輝きが一辺に失われてしまったような気がした。

正直言うと私の期待は裏切られた。自分の青春の旅を淋しくさせた、大げさに言えば人生という旅の列車を乗り遅えたことになったかも知れない事件の理由としては、何かもつと劇的でスキャンダラスでセンセーショナルなことでなければならなかったのだ。

——そうか…これが43年間も疑問に思っていた謎の答えなのか。まいった、まいった…。

謎が蒸発してしまった。長年の胸のつかえが取れた、というより完全に肩透かしをくらった。

——それは残念でしたね、と言おうとしたが、そもそももつと残念なのはこっちの方なのだ。がっかりしてとてもそう

は言えなかった。そんな私の様子を察したのか、彼女が言った。

「でも、どうしてそんな昔のことを知りたいの?」

——えっつ?! 何故かって? …それを言わせるのかよ、…知りたいんじゃないんだよ、そうじゃないんだよ、僕は昔からずっと君のことが気になっていたんだよ。だから…。

そう思った瞬間、言葉にならず思わず目に涙が溢れてきた。

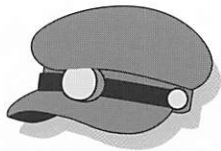
——ある意味、君は僕の青春を止めてしまっているんだぞ。…やっと言葉が出た。

「いや…ただずっと気になっていたから…」

変な人、と気まずい表情を見せるかと思つたら、僕の気持を何となく分かってくれたのかな、彼女は昔懐かしいあの笑顔を見せて僕に言った。

「長かったね」

「大波が来るかどうかは天任せ風次第、運良く空洞ができて、すぐに崩れ落ちてくぐり抜けられない。ただひたすら次のチャンスを待ち挑戦する…これの繰り返し。偶然の巡り逢わせを信じ利那的時間空間にしか身を置けない…。青春って何だかパイプラインに似てますね。」



潮干狩りの思い出

春の風物詩、潮干狩り

高 23 回 坂本智臣

有明は干満の差が大きく、5、6メートル以上の満ち引きがある

干潮の時間を見計らい川を下り、浅蜷、赤貝のいそうな場所に碇を下ろし、1〜2時間程待つ

大人にとつては、この待ち時間も大切な時間であり、船上で宴がはじまる

しかし、子供にとつては、この1〜2時間がおそろしく長い時間となる

獲物を前にして、手も足も出せない歯痒さでイライラ状態となる

水深が一メートル程になると、大人達は宴を終え、海に入っていく

足で砂をほじくり、足指で貝を挟み、採り始める

イライラは絶頂期を迎え、痺れを切らし、潮が引ききる前に海に入る

先に入った大人に負けまいと、服が濡れるのも気付かず、貝採りに没頭する

潮がすっかり引いてしまうと、いよいよ本番である

潮はあつという間に満ちてくるので、短時間の勝負だ

浅蜷、赤貝がメインだが、蛤、あげまき、牡蠣殻の隙間の蛸等種々採れ、特にタイラギを発見したときの喜びはなんとも表現のしようがない

つい熱中し、いつのまにか周りは見知らぬ船ばかり

我が家の「勝盛丸」は遙か彼方、潮が満ち始め大慌てで戻る

周りの大人達もそれぞれ目的の船を目指す

潮干狩り客のなかには目指す船がわか



らず途方にくれる人もでる
最後の手段は、付近の船に乗せてもらい、
目的の船を捜すことになる

船が浮き、水深が増すと、一隻また一隻
と帰路につく

船付き場までの一時間余り、大人達の楽
しい時間

採ったばかりの貝の味噌汁やタイラギの
貝柱の刺身をつまに酒宴がはじまる

船で出て、ザクザク採れるあの潮干狩り
をも一度やりたい

しかし、四十数年が経ち、有明の海の貝
類が減少したとの声が届く

栄養豊かなあの海が何故

故郷を離れた者の勝手な言い分かもしれ
ないが

生活の糧と愉しみを与えてくれた海を
海に注ぎ込む川を

上流の山々を

大事にしてほしいと願うばかり

学年幹事より

高2会御用達 カラオケソング

高2回 小野 善睦

昨平成十九年はどういう訳か我々高校
2回卒の同期会（高2会）のオンパレー
ドだった。

五月十四日 柳川同期会108名参加

七月三日 東京同期会31名参加

七月七日 福岡七夕会34名参加

その上柳河国民学校の同期会も・・・と
続き、懐かしい顔々々にご対面、それぞ
れ二次会も盛り上がった。

そこで、大いに歌われたのが次の歌で、
以後我々高2会の指定カラオケソングに
しよう！二次会などでは先ずこの歌から
歌おう！ということになった。

その歌は

「ふるさとのはなしをしよう」
である。

元歌は作詞／伊野上のぼる、作曲／キ
ダ・タローで昭和四〇年北原謙次が歌っ
てヒットした。最近では山本譲二も歌っ
ている。

この歌詞を郷里柳川向けに変えたパロ
ディーである。

曲は出だしが一寸難しいが、後半のリ
フレインのところで大いに盛り上がり、
全員で合唱できるいい歌である。

一、塩川に 鳴くや よしきり
むつごろう 跳ねる 干潟よ
夕焼けが 海をいろどる
ぼくが生まれた ぼくのふるさと
ふるさとの はなしをしよう

二、水清き 城のお堀に
どんこ舟 上り下るよ
南風 そよぐ 青柳（あおやぎ）
きみが育った きみのふるさと
ふるさとの はなしをしよう

三、今頃は 南校舎の
クローバー 乱れて咲いて
遠き日の 夢のかずかず
きみが学んだ ぼくの学び舎
ふるさとの はなしをしよう

なお、「塩川」は沖の端川のこと。「南
校舎」は現在の市役所の所にあった旧柳
河高等女学校の校舎のことで、昭和二十
四年伝習館と合併し男女共学になった
後、暫くの間こう呼んでいた。青春の夢
を語り合った懐かしい思い出のマホロバ
である。

各学年の同期会幹事の皆さんも、それ
なりのパロディーを作ってみるまで歌っ
てみて下さい。
楽しいですよ。



高6回(昭和30年卒)だより 「三稜会」の報告

高6回 石橋 修

早春の3月8日、隔年開催が恒例となりました「三稜会」が、新宿三井ビルで開催されました。今回は古稀を記念しての同期会となりましたが、3回連続しての3月8日開催となりました。服部尚子さんのご記憶によると、約半世紀前の3月8日の良き日が、伊藤朝生校長先生に送っていただいた私達の卒業式の日だったそうです。

前回は、北の大地 北海道・札幌から中村 充君が懐かしい姿を見せてくれ、意気軒昂振りを発揮してくれました。

今回は、故郷・柳川を代表して川島(与田)信子さん、酒見(米永)令子さんお二人のマドンナの特別参加があり、柳川弁混じりの活発な情



出席者は 写真

前列 左から 服部尚子、菊次(山浦)伸子、木村(松本)峯子、井手(吉開)由起子、川島(与田)信子、酒見(米永)令子、古賀(城島)祥子、福山(江口)治子、本間(近藤)洋子、荻島直記。

後列 左から 石橋 修、池田勝嗣、井手 真、高口隆憲、白谷茂満、高木 健、川口健寿郎、森 清旨、田中 稔、戸上軍治、岡田哲也、松永真侍、大旗哲也。(敬称 略)

報交換とおしゃべりが尽きませんでした。さらに、女性の出席が多くなり華やいだ雰囲気となりました。

西郷どんを敬愛する白谷 茂満君の自慢の「田原坂」は年期とともに貫禄も加わり、見事な唄いっぷりでした。

松永 伍一先生の大荒中学一期生 松永 真侍君からは先生の講演会を拝聴しましたとお便りを差し上げたところ、先生から丁寧なお手紙と著作本が送られて来ました、と言う後日談の披露がありました。

古賀(城島)祥子さんが46歳のとき中央大学・陸上部の先輩に勧められマスターズに出場し100メートル15秒3のタイムを出したという話をされたとき、会場に「ウォー」「さすがー」と歓声があがりました。中学日本一の脚は健在でした。

最後は岡田 哲也君がマイクを持ち、「伝えて 習う」と校歌の斉唱となりましたが、途中で歌詞がしどろもどろとなりました。今回は歌詞を準備しておきましょう。

閉会後は古賀 讓次君の店東麻布の「フロイデ」へ有志十数名が繰り込み、例によつての二次会となりました。そこでも、柳川から駆けつけて来てくれた、マドンナお二人が中心でした。



高校14回卒 東京同期会を開催

高14回 中ノ森 重義

十一月九日、日比谷公園内のレストラ「松本楼」で、高校十四回卒(昭和三十八年)の東京同期会を開催した。

定年に伴い、退職後は故郷福岡に帰った人、夫の郷里へ移住した人なども多く、参加者はこれまでよりやや少ない二十四人とどまった。しかし、京都、滋賀など遠方からの参加者もあり、日比谷の森での二年ぶりの再会に、全員が高校時代に心を戻して語り合った。会は午後六時から始まり、幹事から伝習館高の現状などの報告があり、ビールでの乾杯で一気に盛り上がった。昔話に花が咲く一方で、孫の話が多く、年齢を感じさせるシーンが会場のあちこちで見られた。記念撮影を済ませた後、全員が近況報告した。還暦を過ぎてどのような日々を送っているのか、興味深く聞き入っていた。

秋の夜は酒も食事もうまく、予定の三時間があつという間に過ぎたのは言うまでもない。「話し足りない、飲み足りない」ということで、銀座への二次会に繰り出し、二年後の再会を約束して解散した。

なお、住所が分からず、案内を出せなかった同期生もまだおられると思います。東京同期会とはいっても、これは東京で開催する同期会という意味ではありませんので、地方在住の方の参加も大歓迎です。参加希望の方は以下にご連絡いただければ幸いです。姓が変わった方は旧姓も書いてください。

連絡先

〒227-0052

横浜市青葉区梅が丘36-58

中ノ森 重義宛

ふるさと瓦版

新

市史抄片

29

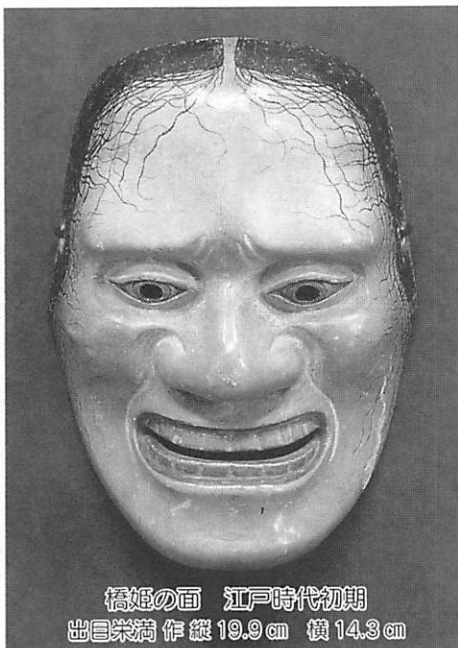
立花家に伝わる「橋姫」の面

能面の「橋姫」は、嫉妬が昂じて鬼と化した女の面です。嵯峨天皇の時代、ある嫉妬深い女が貴船の明神に詣でて鬼となることを願い、神のお告げを受けて宇治川に二十一日間つかった所、

愛の裏切りに対する恨みのはてに鬼と化した女性の面ですので、その相貌は敵愾心に満ちており、激情の色があらわです。

旧柳川藩主立花家に伝わる「橋姫」の面は、女性の相貌にしては鼻も顎もたくましく、口は大きく左右に開かれ、金泥に彩色された上下の歯列がむき出しにあらわれます。眦をつりあげた目は、瞳の部分に金具が嵌め込まれ、その周囲には朱彩がほどこされます。髪の毛描きは通常の女面と同様、中央から振り分けた形に描かれています

が、激情にかられた女の狂乱をあらわすように、額からこめかみにかけて添え毛が弱々しく乱されています。額は白く、眉より下は朱を混ぜた薄い褐色で彩色されていますが、これは宇治の橋姫説話において、彼女の出て立ちが「顔に朱をさし、身に丹を塗り、鉄輪を戴いて三つの足に松を燃やす」と描写さ



橋姫の面 江戸時代初期
出目栄満作 縦19.9cm 横14.3cm

れているためです。ちなみに鉄輪とは金属製の輪に足が付いたもので、炭火の上に置き、鉄瓶などをかけるのに用いる道具です。能「鉄輪」では、女が鬼となるための扮装として、鉄輪を頭上に戴いて登場します。そして物語の後半、鬼となった女は自分を裏切った夫に復讐をとげようとしますが、祈禱を行っていた陰陽師の力に負け、退散することになります。

この「橋姫」の面、面裏額部分に「出目栄満」という焼印が押されています。栄満は世襲面打家（近世に成立した世襲能面作家の家系）のひとつ弟子出目家の初代で、江戸時代初期に活躍した面打です。本作品は通常の橋姫に比べると表情が激しく、嫉妬に狂った女的情念が見事に表現されています。

専門研究員 才藤あずさ



橋姫・面裏焼印部分

『宝』となった国重文『昇開橋』

大川 7日、学会が「機械遺産」に認定

社団法人日本機械学会は、設立110周年を記念して今年の8月7日(機械の日)から毎年、「機械遺産」を認定していくことにした。初回の今年には25件を選出、大川市と佐賀市間の筑後川に架かる「昇開橋(じようかいきょう)」が選ばれ、植木光治市長が東京での表彰式に臨む。

巻揚げ機に高い技術



「機械遺産」となる昇開橋

認定することにしたのは、歴史に残る機械技術関連遺産を大切に保存し、文化的遺産として次世代に伝えていくことが目的。昇開橋は工学的視点から、機械技術の「発展史上、重要な成果を示すものである」と高く評価された。

昇開橋(全長506m)は昭和10年(1935)完成の鋼製昇開可動橋。機関車を走らせたが、中央(24m)は、大型船の運航を可能にするため23m上がる仕組みになっており、10馬力のモーター2台で動かす。鉄道用の橋としては当時、東洋一を誇ったが、この昇降の高さと速度もまた当時最高だった。昇降させる巻揚げ機械は、この橋の設計にあたって考案された。

塗り替え 来秋から

昇開橋は、国鉄時代には7、10年に一度のペースで塗り替えを行ってきたが、大川市と諸富町(現佐賀市)所有になってからは、観光資源として遊歩道を整備した平成5年(1993)以来、色の塗り替えは行われていない。最近では色落ちや腐食が

目立ってきたため、管

理する昇開橋財団(理事長・植木市長)はこのほど、同橋の塗装の塗り直しと橋脚補強などの補修工事の計画をまとめた。予算は2億1633万円、5、7割の国の補助を見込む。各種手続きがあり、工事開始は来年10月ごろになりそうという。

柳川墓情⑬ 崇久寺の山田家(洋次監督実家)の墓



山田洋次監督の父・正さん

山田洋次映画監督の父・正さんは柳川市曙町の長野家が実家。蒸気機関車を設計する技術者で、監督は1931昭和6年に大阪府豊中市で生まれた。監督2歳のとき、正さんは満鉄(南滿州州)鉄道に入社のため満州へ。奉天現(瀋陽)、ハルビン、新京現(長春)と引越し、終戦は大連で迎える。帰国後、旧制山口高校から東大へ進み、松竹入社。映画監督としての活躍は紹介するまでもない。

正さんがなくなったあと兄弟で部屋を片付けたところ、ベッドの傍の横になって目の届きやすい位置に、北原白秋詩碑「帰去来」の拓本がかけられてあった。横になつて眺め続け、故郷柳川を思い出していた父の気持ちを感じ、監督は涙した。

監督の實家

映画の「帰去来」拓本は字も読みづらいため、白秋の「帰去来」と気づいた人は少ないことだろう。それを寅次郎がじつと見つけ、画面は柳川沖端の三明橋際

の風景だ。常は秋の中学を出ているというから、生まれ故郷が柳川で、小学校までそこで育ったのだろう。

旅館「沖吉」へと移る。監督はこんな場面にはきりげなくお父さんの思い出を入れていたのである。

監督兄弟は父の故郷への思いを込めて、柳川市東蒲池の菩提寺、崇久寺(こうきうじ)に墓を建立する。墓は35(昭和10)年に父たつとて75(昭和50)年に改修されたもので、監督の名前も建立者として刻まれている。

さらに監督は、寅さんシリーズ第32作「口笛を吹く寅次郎」のなかに入れて、寅さんとお父さん(ソウキウウジ)に電話して代わりを……というくだりがそれ。山田監督の父への思いが、柳川の人以外にはわからぬように隠されているのだ。

監督は時代劇2本目のこの作品で、人間の古き良き日本の精神を継承してい

た下級武士を描き、こゝろ語る。

「給料を下られ半ばで自給自足を強いられた下級武士はつましく、本当につらかったはず。それでも貧しさに耐え、むしろ誇りすら持っていた。恥じる気がなければ人間は貧しくない。思い返してみたら、力があつた。」

「昭和30年代以降、この国は壊れた。以前は貧乏文・原達郎 写真・矢部謙章」

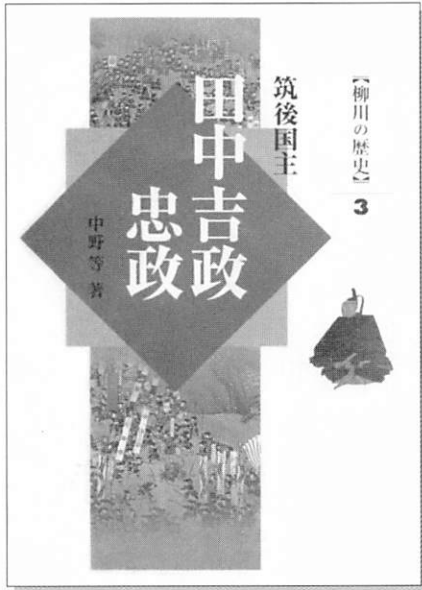


東蒲池の崇久寺にある山田家の墓

「ちくごタイムス」2007年9月8日号より

「ちくごタイムス」2007年8月4日号より

書籍など紹介

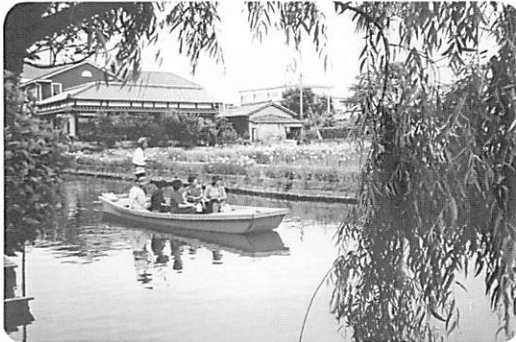


「ちくごタイムズ」より



「ちくごタイムズ」より

○「柳川ゆかりの人々」



発行責任者 田中敬之助「高7回」

目次

	筆者 or まとめ	ページ
1. 棚倉を訪ねて (立花宗茂公)	田中敬之助	1 ~ 4
2. 300年ぶりのご対面 (安東省庵没後300年祭及び孔子祭)	田中敬之助	5 ~ 9
3. 白秋・一雄のおもしろ発見 (北原白秋・檀一雄)	田中敬之助	10 ~ 14
4. 新谷弘美氏特別講演会 (新谷弘美)	中村 奨佑	15 ~ 16
伝習初！数学オリンピックで全国大会へ (中島正貴)		
5. ご先祖は柳河かんも (長岡輝子・服部幸應・伊藤整一)	田中敬之助	17 ~ 21
6. ふるさと人物記 (曾我祐準)	中村 奨佑	22 ~ 23
7. 筑後百年の人物誌 (北原白秋・伊藤整一)	熊本日日新聞	24 ~ 25
8. 小野家の人々 (その1) (ヨーク・オノ)	田中敬之助	26 ~ 29
9. ふるさと人物記 (岡田孤鹿)	中村 奨佑	30 ~ 32
10. 小野家の人々 (その2) (アンナ・小野)	田中敬之助	33 ~ 35
11. 柳川の掘割を再生させた男 (広松伝)	松永 泰輔	36 ~ 38
12. 良清寺と松田聖子さん (松田聖子)	島田 堯生	39
13. 弥生さんを囲んで語ろう会 (高田弥生)		
TOPICS (柳川関連の代議士たち)		
14. 山田洋次監督講演会 (山田洋次)	田中敬之助	40 ~ 43
15. 立花家伝来 能面 能装束展と 古賀政男 音楽博物館 見学 (古賀政男)	資料提供 平出 悦一	44 ~ 45
16. 新珠三千代姉妹 (新珠三千代・桂典子)	田中敬之助	46 ~ 50
17. 平金有一さんをご紹介します (平金有一)	田中敬之助	51 ~ 52
18. 駐 徳永英明さん (徳永英明)	田中敬之助	53
19. 10代横綱「雲竜久吉」(雲竜久吉)	中村 奨佑	54 ~ 55
20. 蒲池氏の地福寺に阿弥陀如来 (松田聖子)	田中敬之助	56 ~ 58
21. 活躍しています (妻夫木聡・北山たけし・琴奨菊岡 ・福川素子・大坪盛人九段)	西日本新聞	59
22. 特別講演「想い出の柳川」(松永伍一)	田中敬之助	60 ~ 62
23. 古賀繁一氏 (古賀繁一)	田中敬之助	63
24. 北原白秋と検事長 (北原白秋・徳永栄吉・西田洪三)	田中敬之助	64 ~ 67
25. 日本美術2題 (別役恭子・浜野弘子)	松藤 良生	68 ~ 70
26. 琴奨菊岡に技能賞 (琴奨菊岡)	浜野 弘子	71
27. 野中春三氏 (野中春三)	雑誌 誌 大相撲	72
28. 内山田洋さん近く (内山田洋)	田中敬之助	73 ~ 74
29. 伊藤哲朗警視総監 (伊藤哲朗)	雑誌 週間朝日	75
30. 中村天風の魅力 (中村天風)	資料提供 三田村靖子	76 ~ 78
	資料提供 古賀日出雄	79 ~ 83

高5回 岸 洋子さんが 美術展に入選されました。

本人談―高野山には特攻隊十四期の義兄の慰霊塔があり主人（高五回岸 栄洋）と宿坊に泊りスケッチしてきました。



入選絵「高野山」

第20回 上野の森美術館 日本の自然を描く展

2007年8月5日〔日〕―8月24日〔金〕

西日本展 9月20日〔木〕―9月24日〔月〕

兵庫県立美術館 原田の森ギャラリー

高14回 綿貫直諒（画家） さんの個展

平成19年10月

11年ぶり古里で個展

イタリア在住の綿貫さん
自然や建物など47点

柳川市出身でイタリア在住の画家綿貫直諒さん（*）の油絵展が、大牟田市不知火町の大牟田文化会館で開かれている。イタリアの自然や歴史的建造物を描いた風景画など四十七点を展示している。入場無料、七日まで（二日休館）。

▶西日本新聞より

綿貫直諒の油絵展

- 期間 10月31日まで（月、火曜休館）。午前10時〜午後6時
 - 会場 ギャラリー柳川（袋町）
 - 内容 柳川出身でイタリア在住の画家の作品展（無料）。
- 問い合わせは、ギャラリー柳川（☎72・7770）まで。

▲市報「やながわ」より

平成20年

・松屋銀座にて開催予定

募集中！

1. 表紙絵・表紙用写真
 2. 原稿―伝習館OBならダッデンヨカバンモ
 - テーマ―自由（同窓会報にふさわしいもの）
 - 小説・随筆・詩・短歌・俳句・川柳、絵画・写真・絵手紙、書など
 - 字数制限なし（極力四〇〇字詰め（20×20）原稿用紙使用）
 - 写真・絵・カット添付可
- 表題・投稿者氏名・卒業年度・総字数を書いて下さい。

―原稿送付先―

〒344-0032

春日部市備後東8-8-32

伝習館東京同窓会 小野 善睦 行

☎・FAX 048-735-2431

広告募集

チラシ広告

対象Ⅱ東京同窓会会員向けに製品・商品営業内容をPR、販売したい方。

- チラシ三千部を作成し（フォーム自由）事務局宛（裏表紙参照）送付下さい。会員への会報送付時に同封郵送します。
- 広告代金Ⅱ一件につき弐万円を賛助金として頂きます。

会員の皆様からも、希望業者の方をどしどしご紹介下さい。

編集後記

○今年隔年開催の総会が開かれます。最近減多に使わない柳川弁、大川弁、瀬高弁等で、大いにシャベって「ふるさとのはなしをしよう」ではありませんか！

○皆さんからの連絡、小原稿の送付などに利用頂くよう事務局宛のFAX送信紙を一頁作りました。気軽に送信下さい。

- 次号（第9号）表紙絵・写真募集中です。
- 現在の編集委員は次の通りです。

小野 善睦（高2）・内山 秀生（高10）・永倉（跡部）素子（高10）
会長 江崎 正直（高2）

副会長 松永 肅（高5）・原田（立花）万紗子（高13）

発行責任者 江崎正直

〒156-0043 東京都世田谷区松原3-39-25・801

FAX 送信紙

FAX : 03-3918-8139

伝習館東京同窓会事務局 御中

発信者お名前

TEL : FAX

中学 : 高女 : 高校第 回卒

事務局への意見、連絡、感想など。

又、会報へのご投稿（短文、詩、短歌、俳句、川柳など）に使用下さい。



伝習館東京同窓会事務局

〒170-0003 東京都豊島区駒込3丁目3-19 千鳥屋方

TEL 03(3915)0865 FAX 03(3918)8139

<http://densyukan-tokyo.jp/>